
モノもち

テイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノもち

【NZコード】

N1854L

【作者名】

テイク

【あらすじ】

心を込めて使った物には魂が宿る。

平凡な高校生望月透。彼は物を大切に使い大切にする心優しい少年。

そんな彼に舞い降りたささやかな奇跡。壊れるまで使った物が人間になるという。

これは人間になった物達と彼の物語。

プロローグ（前書き）

この小説は物をすぐ捨てる現代社会の人々に物申す小説です。

嘘です

プロローグ

神様がいたとして神様はきっとこの小さな世界に物を作りすぎてしまつたのだろう。世界には物が溢れすぎている。それを良いとも悪いとも言わないけれど物にとってはそもそも言えない。今の物が溢れた世の中にはいくらでも変わりはある。まだ使えるのに新しいのが欲しいから捨てる。いらないから捨てる。必要ないから捨てる。人間達の勝手な都合で物は捨てられる。

僕の名前はむちづきとおる望月透。平凡をそのまま人の形にしたような人間だと自負している。一点を除いて。それは物持ちがいいこと。それだけは他の人間とは一線を画す。もつ一つは物集めだ。まだ使えるのに捨てられている物を見るどビックリしても拾いたくなること。

なんでこんな話をしたのかと言つとこれらのはせいで僕が体験した不思議な出来事を語るためだ。いや、体験したと言つよりは今も現在進行形で続いているこの出来事を。

荒唐無稽、奇々怪々。そんな言葉で表すのがぴったりなまるで夢のような出来事。語りぬくせば日が暮れるけれど語ろう。誰にも語りたくない、誰かに語りたいそんな出来事を。

これは僕に降りかかったちょっとした奇跡の話。

そして僕と彼女たちの話だ。

どこから話始めようか。やはりあの日、僕がひいきにしている古道具屋古幻堂を訪れた所からにしよう。それなら僕についてもっとわかるだろうから。

じゃあ、始めよ。季節は夏、7月21日。属に夏休みと呼ばれ
る長期休暇の初日。僕は朝早くから古道具屋古幻堂へと向かってい
た……

プロローグ（後書き）

次の更新予定は未定。出来次第あげます。

感想をお待ちしています。

批評は一切受け付けません。メンタルの弱い作者が死にます。

第一話 出会い

季節は夏、7月21日。夏休み初日だ。太陽が熱心に地面を照らし地球温暖化の影響もあり気温が上がりに上がった日。こんな日は家中でエアコンに当たって涼むのが常識だが僕は今外でアスファルト舗装路という夏と相性最悪の道を歩いていた。

「あちー

「これは砂漠なのではないかと言ひへりい暑い。

「地球温暖化マジでなんとかしないとな

そんな事を考えてしまつ暑さの中ビニに向かっているのかと言ひと僕がひいきにしている古道具屋の古幻堂に向かっているのだ。僕が古幻堂をひいきにするのは品揃えが豊富で尚且つ安いからだ。

言つておぐが古幻堂に来るのは僕が貧乏だからではない。むしろ逆だ。僕の家はお金持ちである。今は僕は実家から遠い高校に通つてるので一人暮らしだが仕送りは余りある程だ。

そういうしててる間に古幻堂についた。早くこの暑さから逃れて古幻堂の中に駆け込む。中は冷房のきいた快適空間だった。それと同時に古道具の匂いがする。店内は薄暗い。

「こたにちは源さん

「おお、透君かいりつしゃい

店の奥のカウンターに座つててる白髪の老人が店長の源さんだ。

97歳なのだがバリバリ元気な町内で有名な老人。

「何か新しい物は入りましたか？」

「そうだな。その辺のタンスは昨日入った奴じゃ」

入り口付近に置かれたタンスを見る。所々傷があるが使えない程じゃない。いい木を使ってるようだし。

「勿体ないな」

「本当に透君は今時珍しい子じゃな。今時の子供はすぐ新しい物を欲しがる。なのに透君は違う。なぜじゃ？」

「いつも言つてるでしょ源さん。まだ、使えるのに使われずに朽ちていくのは物が可哀想だって」

このタンスだってまだ使えるのに可哀想だ。

「そうじゅつたそうじゅつな。それで今日は何を探しに来たんじゃ？」

「本棚が欲しいんだ」

「本棚か、確かあそ二じゅ」

源さんの指差した所に行く。古い本棚がいくつかあった。まだどれも充分に使える。

「でもデカいな」

これじゃ持つて帰れない。

「何儀が運んでやるから安心せい」

「助かります。じゃあこの黒いのを貰います。幾らですか？」

「いつもひいきにしてもらつたるからな配達代も込みで一千円じゃ」

「ありがとうございます。はい一千円」

「毎度。では、行くとするかの」

源さんが本棚を持ち上げた。本当この人が97歳とは思えない光景だ。源さんは本棚を外にだしリアカーに乗せた。

「お前さんも乗りな
「でも」
「いいから
「はあ」

源さんに言われた通りリアカーに乗る。

「じつかりつかまつておくんじゃぞ」

わけのわからないまま源さんの指示に従う。

「出発じゃ

物凄い速度でリアカーが発進した。例えるなら某スペースなアミーズメントパークのザターンの発進とほぼ同じ感じた。これ何人の人がわかるのかな。

行きは三十分かかった道のりをたつた五分で源さん×リアカー+本棚+僕は走破してしまった。本当源さんは凄い人だ。

「ふいへ、着いたぞい」

「ありがとうございます」

「で、どこに持つて行くんじゃ?」

源さんが本棚を抱えながら並べた。

「 いじりです

家は一軒家だ。両親が建てた一階建ての家。その一階の僕の部屋に運んでもらった。

「 ありがとうございます」

「 いいんじゃよ」

「 麦茶でも飲んで行きますか?」

「 いや、よこよこ。忙しいんでな」

失礼だが古幻堂が忙しい所を見たことは一度もない。

「 じゃあまた今度」

「 ああ、おつとねうじゅ。もうすぐ始まる、みつせへ始まる」

「 何が始まるんですか?」

「 何、直にわかる。さてといつまでも物を大切にな」

源さんはそう言って帰つて行つた。

「 何だったんだ? まあ、いいか」

気にはなるが気にして何か変わるわけでもないのと氣にする」とを止め家に入った。

「 さて、物は心を込めて使い続ければ魂が宿る。さて、どうなるか

源さんがリアカーを押しながら呟いた。その後ろには数人の女性達が連れ添つようつに歩いていた。

* * * *

「さてと、とりあえず片付けよつ」

部屋に散乱していた本を買つたばかりの本棚に入れる。片付け終わつたのときには畳頃になつていた。

「ふう、よし。これからよろしくな」

軽く本棚を叩きながら言つた。それからリビングへ。リビングにあるのは殆ど古幻堂で買つた古道具。まだまだ使える物ばかりなんだから勿体ない。別にドケチというわけじゃない使われないまま朽ちていくのが可哀想なだけだ。

「さてと畳ご飯でも作るか」

材料を確認するために冷蔵庫を開ける。料理はそれなりに出来る。一人暮らしだからな。

「う~ん、ミートパスタでもつくらひつ」

材料はパスタ、サラダ油、鷹の爪、にんにく、豚ひき肉、玉ねぎ、ピーマン、醤油、酒、トマトケチャップ、顆粒コンソメ、塩・黒こしょう、砂糖。簡単な奴だけどね。レシピは昔パソコンで調べたりした。

「さて、作るか

まずは下ごしらえだな。鷹の爪は種をとつて輪切りにして二三二
クはみじん切りにし玉ねぎは粗みじん切り。ここでパスタを茹で始
めてつと。次はフライパンに油を熱し鷹の爪とにんにくを弱火で炒
め香りが立つたらひき肉を加えて中火で炒める。火が通つたら玉ね
ぎを加えて炒め醤油、酒、トマトケチャップ、顆粒コンソメ、塩・
黒こしょう、砂糖を加えて炒める。茹であがつたパスタをこれに加
えて、よく和えて完成だ。

「よし、完成。じゃ、いただきます」

「うん、うまい。

「さてと宿題でもしよう」

片付け終わったので宿題でもすることにする。ここで終わらせて
た方が後々楽な気がする。なにか嫌な予感がするんだよね。ここで
終わらせないと終わらせられなくなりそうな予感が。そんなわけは
ないと思うが我が家のはじめの家訓、直感にはとりあえず従えを忠実に守つ
ておこうと思う。愛用のシャーペンを持ちはじめる。

・ · ·

バキッ

「うわ

シャーペンがぶつ壊れた。

「クソもつ寿命か

「これ気に入つてたんだよな。小学三年生から使い続けて八年。僕の人生の半分を供に生きてきたシャーペン。それが壊れたのだ。

「…………」

それをそつと仮壇に。これ壊れた道具専用。せめて僕だけでも供養してやううと思ってな。つぐづく変人だと思つよ。これに関しては。

「今までありがとうな」

そう言つた瞬間シャーペンからが放射される。

「うわーーー！」

田が開けられないほど光の奔流。そしてそれが収まつたときそこには女の子がいた。

「はーー？」

なにこの状況。おかしい明らかにおかい。何があつた。シャーペンが光つたと思った途端女の子が出てきた。

「あーおにいちゃんだーー！」

ますますわけがわからん。僕に妹なんていない。それにこんな子知らない。それにシャーペンが無くなっている。

「お、お前は誰だ？」

「誰つてさつきまでお兄ちゃんと一緒にいたじゃん」

「そんなわけないだろ。お前いなかつただろ」

「いたよ。あ〜、お兄ちゃん状況わかってないよね」

「聞くまでもなくな」

「えつとわたしシャーペン」

「はー?」

まで、「コイツ今なんていつたシャーペン、うん。確かにそういうた。…………はあ!?

「お前人間じやねえか。どこをどう見たらシャーペンに見えんだよ」「うん、人間になった」

「…………はあ!?」

人間になつたつてなんだそれはどんな超常現象だ。誰かここに来て説明してくれ。いや、こられたら困る。家に見知らん幼女下手すりや捕まる。

「えつとじやあ、説明しますね。お兄ちゃん」

「とりあえず頼む。なつとく出来るのを」

「うん、えつとわたしはそうですね〜ん 九十九神と呼ばれるものですね」

「九十九神?」

「はい、えつと確か、長年大切に使つた道具には魂が宿るといいますよね。それが人間の姿をとつたのがわたしです」

…………さて、まつたくわからない。ただの電波少女なのかもしないのかもしれないし。

「だが、九十九神つて普通長い年月が経つたものがなるんじやないのか？」

「…………」

「おー」

「で、でもでも、わたしおにいちゃんのシャーペンだよ！――」

「それを証明する証拠はあるか？」

「証拠があれば信じるしかない。」

「証拠？　え～っとね、ん～？　じゃあ、お兄ちゃんしかしないことを言えれば信じてくれる？」

「ああ」

「そりだね小学二年生のときわたしをなくした時どぶの中まで探してくれました。そしてわたしを見つけたのは自分の筆箱の中

「なんで知ってる？」

「そんなこと誰にもいったことないぞ。しかもそれが僕のミスだったことなんて誰にも言つてないぞ。」

「そりゃお兄ちゃんのシャーペンだったからです」

「これは本当に信じるしかないよつだ。」

「…………酷く複雑な感じだ。自分のシャーペンと話してゐるのつて」

「そうですね～。あ、そりだ言ひました

「なんだ？」

シャーペン少女が真剣な顔で言つた。

「壊れるまで最後まで大切に使ってくれてありがとう

」
こう言われたとき、「あ、ここは本当にシャーペンだったんだな」と思った。

第一話 出会い（後書き）

はい、妹シャーペン登場。

なぜ妹キャラというとシャーペンが新しいものだからです。古いものほどだんだん年が上がります。次回ではもう一人擬人化するはず。でも何が擬人化するか決めてない。あれとかあれとかいいと思うんだけどな

第一話 命名、そして二人目

そんわけで僕の家に新しい住人が増えました。いや、増えたかどうかはわかんないけど。もとからいたわけだし。この白いワンピースを着たショートの黒髪の小柄な妹系元シャープペンシル少女はさて、どうなることやら。

「じゃあ、お兄ちゃんこれからよろしく」

「あ、ああ」

ああ、いまさらながら思うなぜこんな状況に陥ったのだろうか。それともこれは神様が与えた何かなのだろうか。そしたら神様僕になにを望んでいるのか。

「そうだ、名前付けてよ」

「名前ないのか？」

「当たり前でしょ。わたしシャーペンだつたんだからね」

いや、そんなこと言われてもな。

「あ～そうだなシルはどうだ？」

「いいです。シルで」

あつさり決定。名前の由来？ シャープペンシル。ここまで言えばわかるだろう。そのまんまだ。あまり僕にネーミングセンスを求めないでくれ。本当にセンスないから。本当ですよ。

「さてと、これからどうしよう？」

本当にどうしよう。マジでどうしよう。部屋は開いているのだ住む分は関係ない。問題はもしこれが親にばれた場合。

「どうやって言い訳しよう

「これ端から見たら誘拐だよな。家に知らない女の子がいるのって元シャーペンつていっても信じてくれないだろうじ。さて、どうしよう。

「お兄ちゃんどうしたのそんな難しい顔して？」

「いや、ちょっとね」

「ふうん」

「てか、思つたけどなんでお兄ちゃん？」

「えつと人生の半分を一緒に生きてきたんだからもうそれはおにいちゃんつて呼ぶしかないでしょ」

…………」につアホだ。

「いま、シルのことバカにしなかつた」

「いや」

鋭い。シャーペンだからか意外にするビー。

ぐう

「ん？」

シルが真っ赤になつてる。

「腹減ったのか？」

「…………」「ん

「とりあえず夕飯にするか。これからのことはこれから決めよう」

「うん

「うとそうだ、もしかしてお前みたいなまだ出てくれる可能性あるの?」

「あるよ。だつてお兄ちゃん物持^ついし。どんな子も大切にしてたし。壊れるまで最後まで使つたらたぶんわたしみたいにでてくるんじゃない?」

「マジか

これ以上増えたら洒落にならな^カ。とか言つてゐそばか。

バキッ

「あ~」「あ

ホウキが折れました。なぜにー? てか、たてかけてあつたホウキ触つただけだぞ。寿命つて本当にあるのかよ。

「寿命だつたんだね

「いやなタイミングだら^カれ

やはりというかなんというかホウキが光を放つ。そこには女の子が立つていた。

「は~

「あははは、ナイスタイミング

さて、これさびつこう! となのせいでここに立たせられてはもう本

本当に信じるしかない。

「「！」まで使つていただきありがとうございました透様」

「さ、さまー？」

「はい、主人に様をつけるのは当たり前です」

「それなんだけと様はやめてくれ」

「わかりましたそれなら透さんとお呼びします」

今度はホウキが擬人化。腰まである茶髪をひとつにまとめていて全体的にシックな服装で茶色の長袖に黒のロングスカート。こんどはシルと違つて大人びたお姉さんという感じ……いや、お母さんか？ そんな印象を受ける。

「透さん、今失礼なこと考えませんでした」

「いえ！？」

怖い、笑顔なのに怖い。絶対この人怒ると怖い。注意しよう。

「それでは名前をいただきたいと思つのですが

「あ。ああ」

さて、どうしよう。

「じゃあ、キクで」

「キクですかありがとうござります」

よかつた氣に入ってくれたようだ。

「ね、二人目でたでしょ」

シルが笑い顔で言つ。ああ、本当だつたよ。

「はあ～。キクも一緒にご飯食べるか？」

「ええいただきます」

「ああ、じゃあ、ちよつと待つてくれ」

さて、三人分だからな。材料足りるかな。…………足りなさ
そうだな。

「ちょっと買い物行つて来る」

「それなら私も行きます」

「ずるいわたしも！！」

そんなわけで三人全員で買い物に行くことに。シルお前はおなか
すいてるんだよな。

・・・

買い物では知り合いで会わないように警戒しながらだったので余
計に疲れた。結果誰にも会わずに買い物を終えることが出来た。シ
ルが余計なものを買おうとするし。キクは安いものを選んでくれた。
これはうれしかった。新しいシャーペンは買った。なぜかシルが選
んだのだが。元シャーペンだからいいのがわかるのかね。

「じよそつをました」

「じよそつをまーー！」

「おそまつをました」

はい、夕食終了。

「透さん、お風呂がわいてるので入つてもいいですかよ」

キクが言った。

「いつの間に」

「透さんが夕食の用意をしているときです」

手際がいいな。

「ああ、じゃあ、入る」

「シルも！！」

「駄目です」

「ふ〜」

頬を膨らましたままのシルをキクに任せて僕は風呂。

「ふう〜」

落ち着く。何か今日は本当にいろいろあった。

「でも、まあ、なんだかうね

あいつらところのは悪い気はしなかった。

「でもまあ、あいつらが増えるつことはモノが壊れるつことだからな〜」

ふと風呂場を見回す。洗面器、シャンプーなどの石鹼類、髪を洗う裸のシル、シャワー。

え？

「洗面器、シャンプーなどの石鹼類、髪を洗う裸のシル、シャワー」

○

「何でここにいるシル」

「えへへへ、お兄ちゃんと一緒に入りたくて~」

キクまでやつてしまつた。

「シナリオ」

一
五九、五九

容赦なくキクがシルをつれだした。

「……はあ」

強がるはつめのじだん。

風呂を上がる。

卷之三

「はしては行きますよシ川」

ふう、これから本当にどうなるのだろうか。これからもあいつらみたいのは増えるのだろうか。

「まあ、その辺に帰るのもいい

両面の問題は……。

「親にईर्टの説明するかだな」

それは本筋じどうしようもない問題だった。

第一話 命名、そして二人目（後書き）

おかあ…………お姉さん系ホウキ登場
年順

キク>シル

第三話 新生活にまぎれて三人目が出てきたり出でこなかつたり？

朝、目が覚めると僕はリビングの床で寝ていた。どうやら寝ていたソファから落ちたようだ。なぜ、こんな場所で寝ているのかといふとそれは家に増えた新しい住人のせいである。この家は部屋はあるのだが寝具やその他もろもろの家具がない。僕の一人暮らしなのだ当たり前のことだ。それで寝る場所に困ったのだ。一緒に寝るわけにもいかないので僕の部屋のベットを貸して僕はリビングのソファーで寝たというわけだ。

「うつ、体中が痛い」

硬い床で寝たせいで。体中がしきり言つてる。

「まあ、あの一人にこんな思いをさせるよりはいいか」

どこまで行つてもお人好しな僕。いつかこれで痛い目を見そุดよ。

「とりあえず着替えるか」

…………そこで気がついた。着替え僕の部屋だよ。そして今僕の部屋にはシルとキク、つまり女の子が一人寝ています。

「どうしよう」

着替えたほうがいいだろう

「着替えたほうがいいだろう」

そんな格好である。あとで着替えることも出来るが。さて。

「行くしかないな」

別にやましい気持ちからじゃないぞ。こんな格好しているときには誰か来たら困るからだ。それにご飯も作らなければいけない。別に寝ている間に部屋に入るだけだ。そう入るだけ別になにかしようつてワケじゃない。何か害があるわけじゃないし。気づかれなければいいだけだ。それに着替えを取るだけそう取るだけ。

よし、前振り終了。^{ミッション}任務自分の部屋に誰にも気づかれずに入る。

^{ミッション}任務スタート。

「進路クリア」

ほふく前進で廊下を進む。端から見ると変態だな。つたく誰だよこれ。

「目標のポイントを発見」

物音はしない。まだ寝ていると思われる。まあ、行くぞ。本当変態だよな、これ誰だよ。まったく最悪だよな。

ガチャ、ギ

扉を開ける。そこから中を覗く。二人ともまだ寝ている。そつと中に入る。

「任務「コンプライート。潜入成功」

第一任務、一人を起こさずに着替えを取る。

「そ～つとそ～つと」

一人を見ながらクローゼットに移動する。一人ともよく寝ている。うん、女の子が寝てる姿つていいよね。

「よし」

クローゼットから着替えを取り出す。

「任務完了」

第二任務、誰にも気づかれずに写真を撮る。

別に変態的行為ではない。この元道具たちの生態を解明することが今の僕の使命であつて僕のこの現状を解明するのにも役に立つからだ。それに誰かに公開するわけでもない。思い出にもなるわけだし。気づかれなければいいだけだ。可愛く撮るし。

うん、前振りで言い訳終了。てなわけで撮影開始。

「ふう」

よし。任務成功。

「これでよしと」

携帯のカメラで写真を撮った。気づかれてないはずだ。よく寝てたし。うん。可愛く取れたな。

第四任務、誰にも気づかれずにこの部屋をでる。

「簡単だぜ」

「お兄ちゃん〜？？」

「ピクウー！」

「ん～ムニヤムニヤ

なんだ寝言か。危ない危ない。今のうちに今のうちに。

部屋をでた。

「ふう、任務完了。帰還する」

リビングへと戻った。携帯のデータはパソコンにも保存してつと。他にもバックアップをとつてとよし。

「さて、着替えたし。ご飯の用意しよう」

いい朝だな。

・・・

「さて、出来たな」

他の人の分まで作るなんて初めてだな。昨日は混乱してて考える

暇なんてなかつたし。

「うへ、おはよー」

考ふてこむとシルがおきてきた。

「ああ、おはよー」

「おはよーひざりこまか透さん」

「ああ、キクもおはよー」

わひと、既に朝食の準備は出来てるんで食べる。

「おつとんつだ、お前ら今日暇か?」

「暇~」

「暇ですか」

「な~り、買ひ物行くわ。これからこりこり必要になつたからな

その言葉にシルが反応する。

「やた、買ひ物!! お兄ちやんと買ひ物!!」

「よろしこのですか?」

「ああ、遠慮するな。お金は有り余つてゐる」

本当に有り余つてこむ。

「では、お言葉おせんて」

てか、なんだかひぬ、キクつて年の…………いや、考ふのせよ
そづ。

その後準備をして買い物へ。田舎地はデパートだ。ここなら服とかもそろつ。一気にそろえてしまったほうがいいだら。

「とりあえずすきなの選んできてくれ

「うん」

「では、行つてきます」

キクとシルは店の中に。今は服売り場 + 下着売り場だな。こればっかりは僕にはわからない。それに入つたら変態だし。

・・・

三十分後。女の買い物は長いと理解した。

「買つて来たよお兄ちゃん……ほらーーー！」

「見せんでいい」

とにかく買つたことは確認。

「さて、次は家具か。行くぞ」

「お～」

そんなわけで必要なものを買いに家具売り場へ。ちなみに待つている間に日用品は買い揃えました。

「おお～」

シルは驚いてばかりだ。

「さてと、まずはベッドとかか

元が下宿所だったのかなんだか不明だが僕の家は部屋だけが多い。で、和室と洋室半々あるわけだ。まあ、今はそれがありがたい。

「シルはベッドがいいな～」

「私は和室で」

「はいはい」

そんなわけでそれぞれ必要なものを買つていく。といつてもそんなにはない。そんなに広い部屋でもないからだ。

「さて、必要なものは買つたな？」

既に夕方だ。デパートで昼食をとり買い物を続けた。やはり実感女の買い物はながい。

「は～い

「ええ」

「じゃあ、帰るか」

知り合いで会わないように警戒しながら帰る。思ったのだが二つらが余計なことさえ言わなければバレてもよくないか？

「おや、透君ではないか」

源さんに鉢合せしてしまった。

「源さん！？」

「透君も隅に置けないね。こんな可愛い子を一人もとは
え、いや違いますよ」

「ふふ、隠さなくてもいい。さて、じゃあ、邪魔な老いぼれは表舞
台から去るとしよう」

「え？」

すれ違いざま、源さんが呟いた。

「……………大切に使われていたようじやな」

「え？」

よく聞こえなかつた。何を言つたのか聞こいつとしたが既に源さんは人込みにまぎれて消えていた。

「あの人まさか？」

「でもそんな」

一人がなにやら驚いた様子だ。

「どうかしたか二人とも？」

「なんでもない」

「なんでもないです。たぶん氣のせいです」

「そうか？」

疑問は残るが考えてもしかたがない。僕達は再び歩き出した。

* * * *

「ふう、さてと、まだまだ、始まるには時間がかかるな
「マスター」

「大丈夫じゃ」

源さんに数人の女性が寄り添つて いる。

「さて、いくとじょうか」

源さん達はいざこかへと消えた。

＊＊＊＊

「ただいま」

「たつだいま」

「ただいま帰りました」

それぞれも個性がでただいまだ。さて、誰が誰かわかるかな。
答えは一番上から僕、シル、キク。簡単だつたな。

「おかげり」

「へ？」

.....かえつてくるはずのない返事が返ってきた。家中を見るとグレーブルーのショートヘアと同じ色の瞳を持ち僕より1、2歳年上の女の子が居た。青と白を基調としたゆつたりとしたローブのような服を着ていて袖は手が見えないほど長く、裾は逆に太ももが見えるほど短い。真っ白な肌がなんとも言えない色気をかもし出している。そして思う、ああまたか、と。

「壊れるまで、最後まで使ってくれてありがとう」

素つ氣無くその女の子は言った。抑揚のくさしい声だ。

「それで、君は？」

「元冷蔵庫」

「マジで？」

「クリ

女の子は頷いた。

「つてことはついに壊れたわけか」

「クリ

やっぱりか。

「とうあえずバッテ電氣で冷蔵庫注文しちつ」

電化製品はさすがに新品を買ひ。そして壊れるまで大切に使う。

「なんとか今日中に持つてきてくれるらしく」

よかつたよ。

「んじゃ あ中の食材とかは？」

「凍らせた」

リビングに行くと氷付けにされた食材があった。

「どうやったの？」

「私冷蔵庫、冷やすのが仕事で、ちから能力」

あれ、冷蔵庫の時よりパワーアップしてね？ キクとシルはそんなことないのに。

「どんな力が見せてくる？」

「クリ

元冷蔵庫娘の手に透明な剣が現れる。

「冷たいこれ氷だ」

「ほえ～」

シルが舐めようとして。

「やめたほうがいいですよ」

キクが止めていた。とにかくにじれで二人囁きてまた買い物か？

「でも、もう遅いからなお前の買い物は別の時でいいか？」
「いい

それから何かを待つように僕を見る。

「？」

「お兄ちゃん名前だと思つよ」

「ああそつか」

シルに言われるまで忘れてた。

「そうだな、じゃあ、トウカで」

名前の由来冷蔵庫……冷凍庫……トウコ。なんかそんな感じではないので「コを力に変えてトウカに」。わかりにくいけ。

「トウカ……」

「いやか」

「いい」

『氣にいつてくれたんだよな？ 表情が変化しないからわからない。』

「せんと、とりあえず夕食にするか」

新しい家族の歓迎も兼ねて。

第三話 新生活にまぎれて三人目が出てきたり出でこなつたり? (後書き)

クールな冷蔵庫娘、トウカ登場。服のイメージですがパンドラハーツのエローですかね

そして主人公が変態になつてしまつた。どうしてこうなつた。

まだまだ、擬人は増えるかも

第四話 学校

7月26日。夏休みに入り僕に新しい家族が増えた。全員が元は物というよくわからない状況だが。そして今日、今日は登校日といふか補習開始日。補習といつても普通の授業と同じなので行かないと大変なことになる。数日だけだけつこいつ面倒だな。

さて、目が覚めると、なぜか、トウカが僕に抱きついていた。

「またか」

「この二、三日でわかったことはトウカは異常に寝相が悪いこと。自分の部屋で寝ていてもなぜかいつもここに来てしまうのだ。寝相が悪いにも程がある。それに、スタイルがいいのだ現在思春期まさかりの男子高校生にとつて有害以外なものでもない。

「おきてくれ
「ん~、やだ~」

トウカは寝ているときと寝起きは性格が変わる。いつもはクールなのだがこの時はテレる。それはいいのだが。

「頼むからおきててくれ!!
「ん?ん~、ふあ~、おはよ~」

まだ眠そうに目をこすっているトウカ。ダボダボの寝巻きでかなり可愛い。ってそうじゃない。

「はやく自分の部屋に戻つてくれ

「うん」

はあ～。トコトコと自分の部屋に戻つていったトウカ。

「わいと、起きて朝食をわいつと作るか

着替えを済ませキッチャンへ。

・・・

「よし、出来た」

朝食の準備完了。いつもびおりできたな。さてとあこづらを起こしに行くかな。元が物だつたせいかあいつらは朝に弱い。夜に騒ぎすぎてるのもあるだろうが。人の部屋でいつまでもいつまでも。自分の部屋があるんだからそこで騒げばいいのにと思う。とまあ、そんなことよりまずはあこづらを起こしに行かないとな。

まずはシルの部屋に入る。どうせ寝ているのだノックはしない。

「シル起きるー！！」

シルの部屋は洋室でかわいらしこもので溢れている。ベットとクローゼットとテープルがありそのほかにはうさぎやうさぎやうさぎの人形がいっぱいおいてある。

「起きるー！！」

「うーん、あ～お兄ちゃんねえよ～」

「ああ、おはよ～。着替えて下にこいで」

「はーい」

まだ眠いのかフラフラしているが一応起きたようだな。

「さてと次はキクだ」

しつかりとしているようで朝は弱い。

「キク起きうーーー！」

キクの部屋は和室。完璧な和室だ。それ以外にいうことはない。

「ん？ ああ。朝ですか、申し訳ありません。朝はどうも弱くて
いいよ。とりあえず着替えて下に行つてくれ」

さて、最後トウカだ。さつき起き掛けたから大丈夫だろう。

「トウカー！！」

トウカの部屋は洋室で全体的に青で統一された部屋だ。ペンギンとか置いてある。

תְּנִינָה

コイツが一番弱いんだよな。

「好處呢？」

「むあ?
あふああ～～～」

「起きたか？」

「ん、おはよ透~」

「ああ、着替えて下にこいよ」

「うそ~」

全員起こしたといでキッチャンく。しばらへじて三人とも降りて
きた。それから朝食を食べて。

「そういうば透さん今田は制服ですね」

キクが僕の服装を見て言った。

「そうだね、お兄ちゃんどうじつけ?」

「今日から補習なんだよ」

「へ~、わたしも行きたい」

シルが言った。

「駄目」

「え~! どうして

「遊びに行くんじゃないしシルがいける場所でもない。帰ってきた
ら遊んでやるからみんな今田はおとなしく家に居てくれ」

「む~わかった

「わかりました

「……わかつた

みんな聞き分けが良くて助かるな。そんなわけで家をでて学校へ
向かう。

「お~い、透……」

僕に声をかけて来たのはちやうけた男。

「よひ、葉」

「」いつは佳山葉かやまよひ、同じクラスの友達。不本意だが悪友とも言ひつ。

「なあ、なあ」んな噂うわさがあるんだが

「なんだ？」

「お前に似た奴が女の子連れて歩いていたといつな

……。

「そんなわけないだろひ」

「本当か」

「そうに決まってるだろひ」

「まあ、それもそつか。お人好しの透君だし」

「なんだそれは」

「それにしても夏休みまで補習つてのは勘弁してほしいぜ」

確かにな。

「だが、まあ、数日だ我慢しろ」

「ちえ～」

はあ～、危ない危ない。それにしても誰に見つかったんだ？ 誰にも見つからないようにしてたのに。今度はもっと気をつけよ。見つかったらそうだな、下宿人しゆしゆじんとでもしよう。ちよど民宿しゆどみやだったような家だ問題はあるまい。

「まひ、急いづせ」

「やつだな

学校へ。教室に入ると女子一人しか来てなかつた。

「なあ、香奈ほかの奴らは？」

「全員サボリ」

いつ答えたこのセミロングの茶髪の女子は江藤香奈えとうかな、葉と同じく友達。

「全員サボリって……」

僕達以外全員サボリって。

「どんだけ不真面目なクラスなんだよ」

「それは私が聞きたいわよ」

「まあ、俺たち三人だけならなくなるかもしけないだろ」

と樂観的に言ひ葉に香奈が言ひ。

「あの担任の性格を考えたことある？」

「あの担任なら僕達だけでもやりそうだよな。差をつけろって」

「あー、何で俺たちの担任あんなんだよ」

「校長に聞きなさいよ」

香奈の言ひとおりだ。

「そうだ、香奈お前が担任にセクハラされたって言えれば」「

「却下。何で私がそんなことしなきゃいけないの？ 他に頼みなさいよ」

「他に居ないから言つてんだらうが」

「あんたいりんなところで女子に声かけてんだからいへりでもいるで
しょうが」

「いねえよーーー！」

いや、あの顔は居るな。

「まあ、落ち着けとりあえずどうするかだな」

「そのまま補習を受けてもいいがさすがに三人つてのはきついな。

「家族を呼ぶーーー！」

葉が言つ。家族ね。確かにそれは楽だな。つて無理だよ。

「呼んでどうすんのよ」

「なら、友達を呼ぶ」

「だれも来ないわよ」

「透！－ 誰か呼べる奴はいないかーーー！」

いんにはいるんだがな。あいつら三人。まあ、無理だ無理。だつて、元物だぞ。絶対に来たら問題になる。

「いるわけないだろ」

「じゃあ、どうすんだよーーー！」

「それを今考えてんでしょうがーーー！」

さて、あまりしてると担任が来るからな。これでこの惨状を見たらどう思うか。まあ、想像には難くない。だって三人しかいないのだ。これでは誰もでも同じ反応を示すだらう。

「透何かいい案はないか！！」

「いい案はないのー？」「

「ちょっととまで二人同時に言つな」

さて、どうしよう。

「逃げるか？」

葉が言つ。逃げるつてなあ。

「さすがにそれはまずいだろ」

「でも、このまま居るのもね～」

そのままいい案もなく悪戯に時間を浪費してしまった。そして担任登場。若い英語教師で熱血系。どこにでもいるような先生だ。生徒からの人望がまったくない。いまどき熱血ははやらないということなのだろう。

「はじめたって、なんだこの人数は」

三人だけの教室。そりや驚く。もう、驚きを通り越して何かになつていてる。

「全員サボリで～す」

葉が言つ。

「なんだとー！」

本当にこのクラスの奴らはびつにならんんだりつな。

「まあ、仕方ない。お前たちだけでもやるか」

やつぱりね。香奈も予想通りといつ顔だ。葉は絶望に染まつている。

「じゃあ、はじめんばー」

三人だけの授業はとても長く感じたのだった。

・

今日の授業が終わった。午前中だけだったのが幸いだ。

「はあ～」

葉が溜息をつく。

「どうした幸せが逃げるぞ」

「うるさい。透は答えられたからいいんだ。俺なんて俺なんて。ああ、来なけりやよかつた。朝起きて今日なんかいいことありそうだから学校へ行こうと思つた俺がバカだったよ」

まあ、バカだな。その発想が。

「さすがに三人だけってのはきついわね

香奈も言つ。

「しかしながら、うちのクラスの連中そんなに不眞面目だったか？」

「不眞面目といつより担任が嫌いなのよ」

「ああ」

あの担任僕達のクラスでは物凄い評判悪いからな。

「俺も嫌いだな。だから、香奈が 」

「却下」

「まだ何も言つてねえだろ……。」

「言わなくてもわかるわよ」

「おお、以心伝心！－！ なら、俺と付き合つてくれ

「時と場所を選びなさい」

「お前ら、そんなことするより帰るぞ」

二人を伴つて学校を出る。ビートなく担任が落ち込んでいたように見えた気がする。まあ、気のせいだろうな。そうだとしても気にしない。

「で、明日はどうするんだ？」

「明日ね～」

明日か。正直に言えば行く気はしないんだよな。どうせ明日も人は来ないだろうしな。

「まあ、明日考えるか」

「そうね」

そんなわけで明日のことは明日考えるとして今日は帰った。

第五話 中華はやつぱり炎でしょ

散々な補習のあと帰宅。今はお昼を少し過ぎたくらいだ。僕が帰つたことを感じてドタドタを足音が近づいてきた。

「お兄ちゃんおかえりーーー！」

シルが僕に飛びついてきた。それを受け止めて、

「ただいま」

「ああおかえりキク」

ホウキを持ったキクがやって来た。掃除でもしていたのだろう。リビングへ行く。トウカはソファーに座ってテレビを見ていた。

「おかえり」

トウカはクールだ。元が冷蔵庫だからだろうか。

「みんな昼は食べたのか？」

そうだった。こいつら誰も料理できる奴がいなかつたな。

「じゃあ、今から作るからまつてくれ」

「はい」

一階の自分の部屋に行って私服に着替える。

「セイ、何がいい?」

「お兄ちゃんの作ってくれたものなら何でも、だつてどれもおいしいし」

シルは何気にうれしいとを行つてくれる。

「私もシルと同じです。透さんの料理はおいしいですから。特に洋食が」

キクの透ひとおり僕は料理の中でも洋食が得意だ。一応他のも出来るけど。

「じゃ、今日は炒飯でも作るかな」

「この頃中華しないから。

「えっと確かにこのあたりに中華鍋がつと

先に中華鍋をコンロにのせ火をつけようとして。

「あれ、中華鍋割れてるし。それに火もつかない」

セイ、つまりは。

「また増えるってことか」

そういう瞬間光の奔流。目をふさぐ。

田を開けるとそこには一人。赤髪セミロングで赤い長袖にジーパンの長身の女と黒髪、緑のチャイナ服の小柄女が居た。

「お兄ちゃんやんやつらのつて……つわ、また増えてるーー」

光を見てやつてきたシルが驚く。

「あ～、壊れるまで最後まで使つてくれてサンキューな」

赤髪の女が言った。

「最後まで壊れるまで使つてくれてアリガトアル」

チャイナ服の女が言った。

二人ともなんなのか一目瞭然。てか、チャイナ服は明らかに中華鍋だな。

「さつてと透かつたと名前つけろよ」

赤髪の女がヘッドロックをかけながら言つてくる。

「つて、この状況じゃ無理だはなせーーー」

「おつとわりいわりい」

解放される。

「えつとお前はコソロだよな」

「おつ」

「じゃあ、HIMIで」

「あたしはエミか。いいな。炎を連想させて」

「次はワタシアル」

アル口調の中華鍋は。

「美鈴^{メイリン}で」

パソコンで見たのがこれだけだつたからだ。中華鍋要素ゼロの命名。だって、中国の名前なんてわかんないもん。パソコンで見て覚えてたのがこれだつたからだよ。

「アリガトアル」

さつてと、一人も増えてしまったよ。

「あの、今騒ぎはつて、あらあら、また増えたんですね。どうも、私キクと申します。元ホウキです」

やつて来たキクが自己紹介をする。

「ワタシは元冷蔵庫のトウカ」

トウカはそれだけ言ってリビングへ戻つていった。

「あたしは元コンロのエミだ」

「ワタシ元中華鍋の美鈴^{メイリン}ネ」

さてとこれで自己紹介終了。それにしてもまさか一度に一人も増えるとは思わなかつた。てか、この頃一度に壊れすぎな気がするな。大事に使つてたのに。誰かの作為を感じるのは僕だけなのだろうか。

まあ、こうして大切に使つた道具を捨てないで一緒に住めるというのは喜べるんだけど。なぜか全員女の子。これは少し勘弁してほしいな。嬉しいけどね。

「さて、コンロがなくなつたのでご飯が作れなくなつたな」

「おう、それならあたしに任せろ」

HIMIの手から炎が出る。

「これで大丈夫だろ」

「アイヤ、トオル、今回はワタシに任せるコロシ。中華なら任せるアル」

「そうか？ ジャあ頼む」

「任せた」

HIMIと美鈴^{マイリン}二人組に料理を任せてリビングへ。

「あれ、お兄ちゃんなんで戻ってきたの？ おひるいはんは？」

「あの二人がやつてるよ」

「大丈夫なの？」

シルの言いたいことはもつともだ。今まで擬人化した三人は料理が出来なかつたからな。まあ、大丈夫だろ。中華鍋だし。今回は信じよう。もしもの時は出前だな。

・

結果から言えば僕の心配は徒労に終わつた。

「すごいな」

「どうアル」

認めよつ中華は完璧に負けた。

「僕の負けだな。」このチャーハン「うまい」

「よかたアル」

「本当だ～おいし～」

シルも食べて言ひ。

「本当においしえすね」

キクも同じく。

「……おいしい」

とまあ、先輩物三人組は「満悦の」様子。しかし、エミだが、火力あがつたな。人間になつて確實に。

「そうアルがよかつたアル」

「お前は中華担当だな」

これで僕の負担が減ることを祈る。

「任せろアル、トオルには世話になつたアルからな

いい子だ。なんかいい子だこの子。

「さて、とりあえづよろしくな

「よろしくアル」

「よろくな

今日一人も家族が増えました。

第五話 中華はやっぱ炎でしょう（後編）

次回更新は一週間後です。

間章 1

「おい、お前ら早くしゃがれ」

『はい』

高校生くらいの少年にたくさん女性がしたがつてこる。

「つたぐ、お前ら壊されへえのか?」

『めつそりもあつません』

「それなら氣合いいれてやりやがれ」

『はい』

「おぼつかないやめ

部屋に執事が入つてくる。

「どうした?」

「いえ、もう一人の参加者と思える人間を見つけました」

「なんだと!! 本当か?..」

「まことにござります」

「そうかそうか。で、今すぐ行くのか?」

「いえ、まだ、開始の合図はありません」

「そうか、まだか、なら、じつはまゆつくつと戦力を整えるだけだ
な」

「それでござりますね」

「さて、またやるか」

壊れたモノの前に少年が立つ。

「オラ、さつやと出てきやがれ!」

モノが黒く輝く。その輝きが収まつたときそこには人が居た。

「さあ～て聞こうかお前の『ロシュジンサマ』は誰でしょ？」

「あなた様でござります」

モノが言つ。

「はつはつは～、はははははは～！…あ～、楽しくってしかたねえ。早くやつてえな～」

狂氣が渦巻く。

第六話 公園

翌日、補習はなくなつた。全員こないことが確定したので担任が連絡してきた。あのときの担任の声が物凄く沈んでいて聞いて自分の気分まで沈んできてしまつた。まあ、それはいいとして昨日エミと美鈴^{メイリン}がうちの家族となつた。人間1に対し元モノが5もはや人間のほうが少ないという異常事態だがまあ、それなりに楽しくなつてきた。その分食費が上がつてしまつてているのだが。

「ふあ～あ」

朝、今日はトウカは来ていない。鍵をかけたのと寝ているときに戻るように教育してみたのだが、成功したようだ。

「さてと起きるかな」

朝起きてキッチンへ行くと既に 。

「あ、あはようアル
「はやいな美鈴^{メイリン}」

美鈴^{メイリン}が居た。

「早起きは三文の徳アル」

中華鍋のわりにいろいろ知つてるな美鈴^{メイリン}は、もしかしてそういうのつてそのものの歴史とかで変わるのかな。中華つて歴史長そうだし。

「そうか」

「さつき鍛錬を終えて水のみに来たヨ」

「鍛錬？ 拳法かなんかか？」

「そうアル」

「そうか」

なんかこの頃武闘派が増えてきたな。

「まあいいか、とりあえず朝食の準備するか」

「手伝うアル」

「ああ、サンキュー」

「なにすればよいか？」

「そうだな。とりあえずエミを起^{ハシ}してきてくれ

「アイヤ、わかつたアル」

美鈴^{メイリン}が一階に上^{アツ}がつていぐ。

「さてと、その間にト^トシリえだな」

今日は和食にしよう。味噌汁と魚だな。

・

「ふあ～あ。つたくよ、休みなのに起^{ハシ}すなよ」

やつたきたエミの台詞。サバサバした駄目な姉な感じがする。い
うだよなこんな大学生。髪ボサボサだし。

「仕事だ。お前に休みはないだろ？ 新しいコンロといつかいろこ
ろ来るまで」

「あ～、やうだつたな～あ～面倒くせえ」

「お前な～」

「まあ、透を困らすわけにはいかないし飯食えねえのはもつとまづ
いからな手伝つてやるぜ」

「ああ、だが、その前にその髪を何とかして来い」

「あ？　ああ、いいつていいつて」

「お前が良くてもこいつちが気にするわ」

「そつか？　ちょっとまつてろ」

HIIが走つていぐ。そして戻つてきたときには。

「これでいいだろ？」

結んでききていた。それがまた良く似合つている。

「おっし、じゃあやるか」

「ああ」

そんなわけで調理開始。火力上がつている上に大きさも自由自在になつていて。こいつの能力か。それにしても擬人化したら能力が上がるつてどんなファンタジーなんだろう。まあ、それを言つたらこんな状況がファンタジーなんだけど。

・

「よし出来た」

純和風の朝食。

「よつやくできたな」

HIIが言つ。

「いや、お前が余計なことをしなければもつと早く終わつたよ」

「うー、あ、いやー、ほら」

HIIが全部一気にやつてしまおうと言つて火力を間違い失敗し全部最初からやり直しになつてしまつたのだ。

「はあ」

「その……悪かつたよ」

「今度はきちんとしてくれ」

「おー、任せろ」

大丈夫なのか？なんか明日にはといつか皿には忘れてる気がする。

すると。

カンカンカンカーン！！

鐘を叩くような音が聞こえてきた。

『起きるアルー！！』

『うやら美鈴^{マイリン}がシルたちを起^{ハシ}してくれているらしい。つまりあの音は中華鍋を叩く音か。

「うわー！！」

シルがリビングにやって来た。

「うへ、まだ眠いよ～」

「はいはい、シル顔でも洗つてきたり田が覚めると田いつぞ」

「うん、お兄ちゃん」

シルがリビングを出て行つた。入れ違いでキクが入つてくれる。

「おはよ～ひざれこます。透さん」

「おはよ～キク」

キクはシルと違いしつかりと整えてきていた。

「お手伝いしましょ～うか？」

キクが言つ。

「それなら～れ運んでくれ

出来た料理を渡す。

「は～」

「おにちゅ～ん～～」

どうやら顔を洗つて田が覚めたシルがやって来た。

「おはよ～う」

「おはよ～、シル」

「あれ、トウカお姉ちゃんまだ起きてきてないの？」

シルから見てトウカは姉なわけか。つてまあ、一番年下っぽいからな～。

「ああ、まだトウカは寝てるだろ?」

低血圧なんだろうな。冷蔵庫だから。まあ、マイリン美鈴が起こしに行つたからそろそろ来る頃だろ?。

「起こして来たアル」

「ああ、ありがと」

「イイアル」

遅れてトウカが入ってきた。

「おはようトウカ」

「あはは?」

それだけ言つてトウカはソファーに座つた。

「さて、食べるか」

『『『 いただきま～す!』』』

みんな食べ始める。

「シル魚もらうぜ!」

「あー!…勝手に取らないでよー!…」

H///とシルの魚の取り合い。

「ひらひら一人一匹だ」

「足りねえな」

「それなら米を食え」

「おおその手があつたか」

HIIが手をポンッと呴き茶碗を差し出してくる。

「はいはい」

「HIIさん、透さん[に]そんなど」

「いじょ、キク」

「せう、ですか」

「ほひ、他にほしい奴いるか?」

「なら、お願ひするアル」

「わかつた」

美鈴の茶碗を受け取つて、飯をつぐ。

「せうよ」

HIIには大盛りにしてわたす。

「サンキュー」

「ほら。 美鈴」

「ありがとアル」

ああ、家のエンゲル係数が格段に上昇しそうだな。

そして食後。

「さて、これからどうぞつか」

学校があるときは休みがいい」といつがござる休みになつたらなつでやることがないのである。

「それなら外に行こ」うよーー！」

シルが提案する。

「そうだな。まだ、外に出たことねえからな」

H//が言つ。

「ワタシもアル」

メイリン
美鈴も言つ。

「外か」

外に出れば誰かに見つかる可能性があるがみんな出たいようだな。

「そうだな。じゃあ、行くか」「やつた！！」

みんなそれぞれ喜んでいる。

「そうだな少し遠くの公園にでも行くか」

弁当を持つていけば昼の心配はないし。近場を選ばなかつたのは知り合いに遭遇するのを防ぐため。

「わーい！」

「では、準備しないと」

「準備ね」

「おつしとつあえずなに持つてこぐ?」

「まづは昼の弁当アル」

どうやらみんな楽しんでくれそうだ。それから急いで準備して出発。帰ってきたときにまた一人増えていないことを祈る。

さて、家を出て早々僕は後悔していた。今日がたとえ夏休みの平日とはいえ通りには人がいないわけではない。よく言えば個性的な悪くいえば変な集団だ。目立つのだ。それに美少女(?)のも理由と思われる。そしてそんな集団の中心の僕にいやおうなく視線が集まる。

「はあ~」

「どうしたのお兄ちゃん?」

隣を歩くシルが聞く。ここからは視線なんぞつゆ知りやうだ。

「いや、なんでもない」

「こいつらこんなこと言つてもしかたない。

「ん?」

「どじが気分が悪いのなら話つてくださこ」

キクが言つ。

「大丈夫だ」

そう言って歩き続けた。

「ついた

家から歩いて一時間のところにある緑の芝生が綺麗な広い公園だ。
僕たち以外誰もいない。

「広い！」

シルが飛び跳ねながら言ひ。

「確かに、結構広いじゃねえか。それに日差しが気持ちいいし」

HIMIが言つ。木陰にいる僕でも日差しがきついというのにHIMIは
余裕そうに言つた。なんたつて昼ごろだ。一番きつい時間だ。HIMI
がそういうのは元コンロだったからか。

「それなら美鈴も　　つて美鈴！――！」

美鈴はぐつたりと木陰で倒れていた。

「大丈夫か！――」

「うう、暑いアル～」

ただ暑くて倒れただけかよ。

「てか、お前中華鍋だろ。なんで暑さに弱いんだよ」

「つづ、鍋としても暑さ強い限らないアル~」

素材的に熱伝導性がよいからなのかどうやら美鈴は暑さに弱いらしいっぽい。うーん、すぐに熱しやすい性質だからか?

「トウカとりあえず氷してくれるか?」

「…………はい」

トウカが氷を出してくれた。

「ほら、美鈴」

「つづ、ありがとアル~」

美鈴^{メイリン}は暑さに弱いのか覚えておいで。何かあったとき用のために。つて何があるかわからないが。

「さて、来て早々だが、昼にするか」

時間もちょうどいい。一人ダウンしてるがそのうち復活するだろう。ちゅうどいい木陰もあるし。そこに持ってきていたシートを引く。

「さて、食べるぞ」

全員で座つて弁当を囲む。

『 いただきまーす!ー』

全員が食べ始めた。

第七話 遊んでみたらいろいろわかる

シルが玉子焼きを食べる。

「うーん、やっぱりお兄ちゃんの料理おいひいねー！」

「えへへ、めいがねや！」

「おー、やつかねなよ」

こういうのつて妹を持つ兄の気分だよな。まあ、実際の妹はそうはないかなのだが。

「透さんはどこで料理を覚えたんですか?」

キクが聞いてきた。

「あ～、つむはせ、両親が仕事ばつかでほとんど家にいなくてさ自然と覚えたんだよ」

「そりなんですか」

キクが少し申し訳なさそうな顔をする。

「別にそのことについてお前が何か思つてもしかたないし。そのことに納得している。今はお前達がいるだろ？」

そういう微笑むキク。いい奴だな。

ヒヨイ、パクツ、ヒヨイ、パクツ

その隣で無言で食べまくるトウカ。

「トウカも少しおち着いて食えよ
…………」

何も言わず食い続ける。トウカは表情が変化しないので何を考えているのか読みにくい。せめて感想くらいは言つてほしい。仕方ない聞いてみるか。

「おいしいか?
…………」

小さく頷いた。よかつた、おいしかったようだ。

「それはよかつた
…………」

また頷いた。そして黙つて食べ続ける。

「それはあたしがもうつぜーーー」
「アイヤー！ 渡さないアルヨーーー」

HIMIと美鈴メイリンが弁当の取り合ひをしていた。

「喧嘩するなよ
いや、これはあたしが咲きに取つたんだ
「ワタシアル
「おじおじ」

そのままじう着状態が続くかと思われたが

「じゃあ、わたしが食べる」

シルがやつてきてそれを食べてしまった。しかもそれが最後の一
個だったようだ。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「頼む、そんな泣きそうな顔で僕を見ないでくれ」

「ああ、こういう顔に弱いんです。てか、泣きそうな顔ってのは卑
怯だよ。それにキクの視線が痛い。

「また今度好きなの作ってきてやるから、な

「なら、あたしはトンカツかな」

「アタシは玉子焼きアル」

…………一瞬で喜び顔に変わる一人。げんきんな奴らだ。

そしてザーゲートまで食べ終わった。

・・・・

「ふつ、『うそつさまーーー!』

「『うそつさまです。透さん』

「…………『う』

「『う』さまーーー!』

「「うそつさまアル」

「ああ、お粗末さまでした」

みんな気持ちよく食べててくれたな。

「よし、遊ぶぞーーーー！」

シルが走つていった。

「元気な奴だな」

「おっしあたしも行くかね」

「ちょっとクルアル。勝負するアル」

「お、いいなやろうぜ」

物騒な二人が木陰から出て行つた。大丈夫か？ まあ、何とかなるだろ？

スクッヒトウカが立ち上がつた。

「トウカは何をするんだ？」

「…………これ」

巨大な氷塊を取り出したトウカ。

「何をする気だよ」

こんな真昼間の公園で氷塊なんか取り出して何をする気なんだよ。

「…………」

さりに氷の「」とハンマーを取り出す。

「…………まさか、彫刻でもやるきか？」

「…………」

「クリと頷くトウカ。

「そ、そつか」

ま、まあ趣味は人それただし。いや、まあ、トウカたちは元道具で人ですらなかつたわけだが。まあ、いいか。

「じゃあ、がんばれよ

「…………」

再び頷いてトウカは彫り始めた。

「皆さん元気ですね」

「キクは行かないのか？」

「私まで行く」とはないでしょ？

「そうか？」

「そうですよ。それにここで見ていたほつが面白いですし」

公園を見渡す。走り回るシルに戦っているエミと美鈴^{マイリン}、氷の彫刻をしているトウカ。

「確かにな」

見ているだけで楽しいな。こんなのがつらが出てこなかつたら味わえなかつたな。

「おこにゅぢやーんーー。」

シルが呼んでいる。

「さてと行くかな

立ち上がる。

「ほら、行くぞ」

「私もですか！」

「当たり前だろ」

キクの手をとつ立たせる。

「ああ、行くぞ」

シルの元へとキクを引き連れて走っていく。

そのあとほ日が暮れるまで遊んでいた。

第八話 洗濯ばさみ現る

翌日、キクと供に洗濯物を干していた。キクは、掃除洗濯など物や場所を綺麗にすることに専門では右に出るものがない。擬人の二名さんは得意分野がはつきりしている。元がモノだからと思つ。ま、それが何かはそのときにならないとわからないんだけどな。

「キク、洗濯ばさみとつてくれ」

「はい」

キクが洗濯ばさみを差し出す。

「ありがと」

それを受け取り洗濯物につけよつとした瞬間。

バキイ

持つところ（？）が折れた。

「…………」

はい、もうみなさんお分かりのお約束。

刹那洗濯ばさみが光り輝いた。咄嗟に洗濯ばさみを離す。

現れてのは茶髪をツインテールにした少女が居た。

「最後まで使つてくれてありがとうございます」

少女はそう言った。

「え~っと一応聞くけど洗濯ばさみ?」

「はいです」

「そうか」

やはりまた一人増えてしまつたようだ。

「それで、名前をください」

「ああ、そうだな」

何がいいだろ? つか。洗濯ばさみだから.....。

「よしじやあ、サクミだ」

「サクミですか。どこかいい加減な感じがするですがまあ、いいです」

「うぐ~」

確かに安直過ぎたか。まあ、氣に入ってくれたならいいだろ?。

「じゃあ、みんなに紹介するか。サクミ、まあ僕の隣にいるのが元ホウキのキクだ」

「よろしくお願いします」

「よろしくです」

「じゃあ、他の連中に紹介するから行こ!」。キク、悪いけどあとは頼んだ」

「はい。わかつています。あとは任せといて!」

洗濯物干しをキクに任せて家の中へ。

「あ～お兄ちゃん～。洗濯終わ　あれ～？　その子だれ？」

「今紹介するよ。シル」

「うん」

頷くシル。

「この子は元洗濯ばらみのサクミだ」

「またー！…」

「サクミであるしへです」

「うひ。よひしへ」

さて次だな。キッチンに向かつ。Hミと美鈴^{メイリン}がいた。

「アレ、透どうしたアル？」

「どうしたんだ？」

「ちょっと新人を紹介しようと思つてな」「アイヤ、後輩アルカ？ うれしいアル」

美鈴^{メイリン}は嬉しそうだ。

「パシリには使えそうか？」

Hミが言つ。パシリにある氣なのかよ。

「やめんなやんな」と

「冗談だよ」

本当にやつそつなんだよ。

「まあ、とりあえずサクミ　あれ？」

……………サクミはキッチンに入つて来てなかつた。

「お～い、サクミ～！」

呼ぶと、サクミは顔を出した。顔だけ。

「なにやつてんだサクミ～、いつのこよ」

「危険な感じがするです」

「…………」

「ん？　どうした？」

視線がHミに集まる。わかる気がするな。さつきの発言を聞いた限りでは。

「特にそつちの赤毛からは危険な匂いしかしないです」

「しかし、そこにいたら紹介できないし。出て来いよ。大丈夫だよ

「いやです」

即答された。

「どうするかな」

「透さん。任せるアル。伊達に長生きしてないアルヨ。子供の扱い
とても得意ネ」

そういった美鈴^{メイリン}はチャイナ服の袖からアメを取り出した。何でそ
んなの持つてるんだよ。

「……」

サクミがじつと見つめている。

「もっとあるアル」

もうひとつアメを取り出す美鈴^{メイリン}。

「あつ

サクミがほしそうな顔をしてじつとアメを見つめる。行こうか行かないか迷っているみたいだ。

「まだある!」アメが嫌ならチョコもあるアル

アメとチョコが出てくる。一体何個持ってるんだ。

ゆづくつとサクミが出てきて美鈴^{メイリン}に向かう。

「はい、どうぞアル

「…………もきゅもきゅ」

もきゅもきゅ食べ始めた。

「どうアルか?」

「…………おいしい」

「それはよかったですアル

「…………ありがとうございます。いい人です」

餌付けされてるサクミ。

「ワタシ、美鈴^{メイリン}アルよろしくアル
「サクミです。よろしくです」

これで美鈴^{メイリン}とは打ち解けたなあとは問題のH//だ。

「おひ、お前が新入りか」

H//が近づいていくがサクミは美鈴^{メイリン}の後ろに隠れる。

「あ~」

頭をかきながらじつようか考えるH//。

「よし」

お、何か思いついたみたいだ。

「コイツがどうなつてもいいならそのままでもいいが」

H//が僕を抑える。

「おい!」

「いいからいいから」

「よくねえよ! もつと酷^{ヒヨコ}くなるよ!..」

「まあ、いいって」

サクミを見ると。

「ひ、人でなしです。あ.....どの道人ではなかつたんですね。
これはみんな人でなしです」

変な納得をしていた。

「うど、もうこいつじめなことです。早く透さんを離すです
「あ～、離す離す。だからそつとも出ておれやんれよ
「わからましたです」

サクミが前に出る。

「悪かつたな透」

「ん？」
「うるさい！」

取り出したのはお菓子詰め合わせ。

「お前もかよ」
「いい人です」

お前もお前だ。サクニ餌付けされるな。

「はあ～。まあいいか」

本人たちが納得してゐんなら。

「さて、あとはトウカだけだが、今どきにいるんだ?」

「うめ！」

いきなり後ろから声をかけられて驚く。

「お前どこのいたんだよ」

「……すとここにいた」

「や、そう?」

「気がつかなかつた。」

「…………」

トウカがサクミを見る。

「…………トウカ」

「え? あ、はい、サクミです」

名前だけ言つてトウカはせつせとソファーに座つてテレビを見始めた。もづ、何も話を聞く気はないらしい。

「おかしな人ですね」

「言つなよ」

それだけは言つてはいけない。

「まあでも、ここの人たちは楽しそうです。いい人も多いし」

「そうだな」

お前の判断基準はおかしい、そいついたかつたがいえなかつた。

第九話 子供のけんかを悔るながれ

さて、サクミが来てみんなに自己紹介したら昼を食べるには丁度いい時間になった。

「さて、どじやあ、昼だがサクミの歓迎会兼ねてちょっと本気出して作るかな」

「やつほ～です」

「やつた～！」

上がサクミ、下がシル。

「わたしはカレーが食べたいです」

「え～！ わたしハンバーグがいい！」

サクミとシルが言い争いをはじめる。

「何を言つですか！ 今日はわたしの歓迎会ですよ～」

「食べたいものは食べたいんだもん～！」

「駄目です」

「なんでも～～！」

シルとサクミの言い争いは続く。

「駄目つたらだめです～～！」

「だからどうしてよー～～～！」

「どうしてもですー～！」

「う～、わたしよりも身長低いくせにー～～！」

「年下の分際で何を言いますか～～！ わたしの方が1mm大きいで

す！！」

「1mmだけじゃん！！！」

「1mmの差は大きいです。1mmを笑つものは1mmに泣くです

！！！」

本当に子供のけんかだな。見ていてほほえましい。そういうえば喉が渴いたな水でも飲もう。

「わたしの方が胸大きいもん！！！」

「ブツ！！！」

シルの一言で思わず水を吹いてしまった。

「なー？ ななななななー！！！」

顔が真っ赤なサクミ。思えば元シャーペンのシルは僕と一緒に授業に出ていた。といつか使っていた。だからだろうか、シルにはそつち方面の知識がある。

「あんなことやこんなことも知ってるもんねーーー！」

「あう、あう、あう」

対してサクミは元洗濯ばさみ当然そつち方面的知識は皆無。

「そ、そそそそそれで、でもでも、む、胸の大きさはか、関係ないですーーー！」

茹蛸のような顔で言つサクミ。ここで嫌な予感がした。とりあえず逃げる準備をしておく。

「じゃあ、お兄ちゃんに聞いてみよつよー。」

ダツ！…

その言葉を聞いた瞬間逃げ出した。

「あ、まつてよーーー。」

待てと言われて待つバカはいない。ちょうどビービングにキクが入ってきた。

「キク！…」

「はい！…？」

「あとは頼んだ」

「あちよつと」

それだけ言ってキクの脇をすり抜け自分の部屋へと駆け込んだ。

「ふつ」

そのまま逃げなればどうなつていたことか。まあ、普通の男に
とつてはいい展開（？）になつただろうが。僕はごめんだ。他人の
目もあつたし。とりあえずシルにはあとでお礼しよう。その必要は
ないかもしれないけど。それにしてもシルとサクミには困ったな。

「とりあえず一人のリクエストビツするかな」

もう、ハンバーグカレーみたいなのもいいかな？　ふと耳をす
ましてみると。キクの声が聞こえた。おそらくシルとサクミのお説
教だらう。

ゴンゴン！！

ノックの音と共にエミが入ってきた。

「おう、さつきは災難だつたな」

「エミなにか用か?」

「ああ、もう少し説教には時間がかかるらしいからそれを伝えに来た

「わわわわ懲しな」

「はいはい」といってことよ。まあ、ねがわしがしたいなら一品何か追加してくれ」

ちやつかりしる。

「じゃあ、伝えたからなーーー！」

エミは部屋を出て行つた。扉が開いたときキクのガミガミ言ひ声が聞こえた。

「キクは怒らせないよ」としお

そう心にかたく誓つたのだった。怒られなくはないからな。

「さてと、どうやって時間を潰すかな」

といつてもそんなに時間はかかりないだろ？。読書は集中しちゃるといつの間にか夜になつてたりするからな。

「そ、うだな、ラジオでも聞いてよ!」

部屋の中にはテレビはないので棚の上のラジオをとる。結構古いものが修理しながら使い続けてきた。元は僕の叔父が使っていたものらしい。

カチッ

「…………あれ？」

スイッチを入れるが何も起きない。

「おかしいなこれでどうだ」

力チカチカリ、シン

「あついに壊れたか」

どうやらこのラジオはその役目を終えたようだった。つまり。ラジオをベッドの上におく。その瞬間ラジオが光輝く。

「やつぱりか」

さすがになれたので取り乱しはしない。光が收まると大きなゴーグルをつけた白髪をポニーテールにした少女が座っていた。

第十話 ラジオ現る

また、今度はす”いのが出てきたな。“ゴーグルが顔のほとんどを覆つていてその表情はまったくわからない。ちなみに「ゴーグルはある術の書録に出てくるクローンの御妹のかけているアレの真っ白バージョンだ。よく似ている。

「…………最後まで…………ありがとう」

澄んだ小さな声でそういった。

「あ、ああ

「…………」

「えっと、名前だよな

なんにしようかな。

「やうだなお前はティイーだ

正直なんとなくだ。

「…………ア承した。マイマスター」

「それで少し聞きたいんだけどその“ゴーグルは何のためにしてるんだ？”

「…………田隠し」

「田隠し?」

何で田隠しする必要があるんだよ。それじゃあそのゴーグル役に立たないか? そう聞くと声を出そうとする。

「目が見えないから」

とティーは言った。僕は声になんて出していない。心でも読めるのか？

「クリ

ティーが頷いた。

「……それって能力か？」

再び頷くと。

「…………ラジオだから受信して……聞かせるのが仕事…………だから
「そつか」

やはりモノたちは擬人化すると能力が上がるようだ。まあ、あまり人に害はなさうなので気にしないでおこう。

「なあ、顔見せてもらつてもいいか？」

盲目なのには驚いたが口元とかで判断するに結構可愛いと思つ。一度はみておきたい。

「…………それは命令？」

「命令じゃないよ。お願ひだよ」

「…………了承」

ゴーグルに手をかけるティー。そしてそれをはずした。

」の二点リーダーは僕。ゴーグルを取りあらわになつた淡い紅色の瞳が僕を見つめる。全体を見たティーの顔はどこか儂げな美しさがあつた。純粋に綺麗だと思った。

「…………どこか変?」

「いや、変じゃないよ。綺麗だと思つよ」「みひ

「…………そり…………もう、戻していく?」

「ああ」

ティーがゴーグルを元に戻そうとする。少し名残惜しいというか残念だな。

「…………ゴーグルはないほうがいい?」

「そりだな。ないほうがいいかもな」

盲目だけど見た目じゃわからなーし。

「…………そり

ティーは戻しかけたゴーグルを首にかける。重くないのだろうか。

「…………いい?」

「ああ」

でも、やっぱり顔は見えてたほうがいいな。

「…………そり」

表情は変わらないが喜んでいるのがわかる。

「おー、透終わったみたいだぜ！」

H//再び登場。お説教は終わったようだな。

「あと、時間がなかつたから画は美鈴メイリンが作ったぜ」

「ああ、悪いな」

そこでH//がティーに気がついた。

「おー、また新入りじゃねえか」

「ああ、ティーっていうんだ」

「そつかそつか、あたしはH//だようじくな」

「…………よろしく」

「それにしてもけつたいなゴーグル持つてんだな。なんだそりゃ？」

なんと答える気だらうか。もひ、田嶋とほ言えなーい。てかさつきまでのほ田嶋しでよかったのか？

「…………趣味」

趣味にしたようだ。

「へーいい趣味してんじやん」

「…………そう」

「わひとじゅあ、下行くか

下に降つる。中華のこにおこがする。

「…………いいにおい」

ティーは視覚がない代わりに他の感覚が強いからよくわかるだろう。

「アイヤー。透さん悪いけど昼は作ってしましたアルヨ」
「ああ、いいよ。正直な話助かる」
「そう言つてくれると嬉しいアル。そつちの子は新入りアルか?」
「ああ、ティーだ」
「ワタシ美鈴ネ。メイリンヨロシクアル」
「…………よろしく」

リビングに入るとソファーの上でシルとサクミが落ち込んでいた。

「大丈夫か一人とも?」
「あつうつあ、キクおねえちゃんが怖いよ~」
「お、怒らせないようにするです」

キクに色々トラウマを植えつけられたみたいだな。

「まあいい。ほら一人共新入りのティーだ」
「…………よろしく」
「よろしく~、あ~また増えてるよ~」
「またですか!!~ わたしが出てきたあとにすぐですか!!~」
「歓迎してあげるよ!!~」
「冗談です~」
「どうか?」
「そうです~」

う～ん、大丈夫か？『冗談にまつたく聞こえなかつたぞ。

トウカがリビングに入ってきた。

「知らない子がいる。『じ』からさらつてきたの？」

「さらつてない！！」

「じゃあ、誰？」

「元ラジオのティーだよ」

「そう、ワタシは元冷蔵庫のトウカ。よろしく」

「…………よろしく」

そのままトウカはソファへ。

「あらあら、またにぎやかになりましたね」

「ああ、キク。何か機嫌がよさそうだね」

「ええ、うふふ」

ああ～ストレスたまつてたのかな。

「と、とつあえず食事にしよう」

「そうですね」

サクミとティーを加えさらににぎやかになった食卓で昼食を食べた。

そこにはたくさんの人人がいた。

「なあ、じい」

「なんで『ヤモウ』『モウ』『モウ』『モウ』

執事に少年が聞く。

「俺の足りないものはなんだと思ひへ..」

「わたくし 私めにはわかりませぬ」

「そうか。まあいい、それでの件はどうなった?」

執事が書類を出す。

「はい、現在の状況を報告書にまとめました」

「見せる」

「どうぞ」

執事が少年に書類を渡す。その書類には望月透について書かれていた。

「近辺にはモノが張り付いています。それはこちから

違つ書類を少年に渡す執事。

「はつー、シャーペンにホウキに冷蔵庫、洗濯ばさみにラジオ、口
ノロに中華鍋、これはお笑いだあははははーーー！」

大声で笑い出す少年。

「さようですね。我々のモノと違い戦闘用ではありません」

「そりだよな」何より俺とは権力がちがえよー！」

書類を投げ捨てる少年。

「ああ、始まるのが楽しみだ」

「そりでござりますね」

何かが始まるのはまだまだ先。

第十一話 掃除中にアルバムとか見つけると大抵酷い目に遭う

「お~い、シル、そこの奴とつてくれ~」「は~い」

シルが取つて来たはたきで棚の上の埃を落とす。今僕達は物置のそうじと整理を行うことにし実行していたのだ。

「久しぶりだからかなり汚いな」

本当なら頻繁に掃除したいのだが自業自得というか何というか、僕の癖のせいで物が多くすぎて時間があるときしか出来ないのだ。でも、人手いやモノ手が増えたから出来るかもしけれないな。

「よし、とりあえず中にあるものだしてくぞ~!」

物置の入り口近くにある物から外に出していく庭に敷いたシートの上に置いていく。いろんな物がある。

「これは掃除のしがいがありますね」

キクが目を輝かせながら言つ。やはり掃除道具、掃除をするのは楽しいようだ。

「お~! アルバムアル。アルバムをミツケタアルよ~!~
美鈴^{メイリン}が大声で言つ。ちょっと待て!~!

「わ、こら待て!~!」

だが、時既に遅く。HIIがさつと来てそれも見てしまった。他の奴らも続々と集まって来るし。

「へ～、アルバムね。おっ！ 透の小せい頃の写真めっちゃ」

「本当ー。HIIお姉ちゃんわたしにも見せてー！」

「見せる」とを要求するですー！」

アルバムにシルとサクミが群がっている。持つてるのがHIIだから身長差で見れないのだ。やめて欲しいな。

「ほひょ

HIIがシルとサクミにアルバムを見せる。止めようとしたがティーに掴まれて止められなかつた。ティーを振りほどくのは僕には無理だ。力とかじやなくて精神的に。

「「おおお」

何だよ。何見てるんだよ。

「可愛いー！ ちつちゅこお兄ちゃん可愛いー」

シルの一言が僕の心に突き刺さる。そして思って出された言葉まわしき過去。

「女の子の格好してます。可愛いです」

「昔の日本では体の弱い子に女の子の格好をさせたと聞いたことがあるアル」

そう、僕は昔両親のせいで女の子の格好をさせられていた。何故かは不明だが途中からは楽しくてやっていたらしい。それを聞いたときは初めて殺意が湧いた。

「ほら、遊んでないで掃除しましょ！」

「おひ、キク見て見ろよ」

HIMIがキクにまでアルバムを見せる。

「何ですか？」あらあら、本当に可愛いでしょね

……。羞恥心で死にそうだ。死因羞恥心。笑えないな。

「そうだ、実際に見て見よ!」

HIMIが言い出した。

「ちょっととまて!? 何を言い出す!—」

「良いね!」

僕の気持ちなど全くわからないシルが賛成する。

「また、僕 むがつ!—」

ティーに口を塞がれた。言つておくが別に何もやましくないからな。期待するなよ。手で塞がれたんだ。頭一つ分以上小さいティーは縁側に乗つて僕の口を塞いでいた。

「んーんー!—」

「ナイスだティー!—」

全くナイスじゃない！！

「んーんー（離してくれ）」

「……見てみたい」

僕に味方はいないのか。願いを込めてキクと美鈴を見るが。
メイリン

「ごめんなさい透さん。私も見てみたいんです」

「ワタシもアル」

常識人ぽい一人もダメだった。ならトウカは。

「どつちかと言われたら見てみたい」

完全にアウエーだ。なんとか抵抗しようとするのだが。全員に押さえられた。だが、女装道具はないはず。

「HIIお姉ちゃん。かつら見つけたよー！」

シルが余計な物を見つけ出したきた。

「服は私がキクのでいいな」

「そうですね。化粧品もありますし」

マジでやばくないか。ちょっと考え直せみんな。ティーは心を読めるはすだが全く聞いてくれない。

「じゃあ脱がせるアル」

「行くよ」

トウカと美鈴^{メイリン}が服を脱がしにかかる。口を塞がれたせいでトウカはキクに体を押さえられた僕に抵抗する事は出来なかつた。

「！」、これは！？

顔を真っ赤にして驚くキク。

「凄いよお兄ちゃん」

僕を誉めるシル。

「驚き」

珍しく驚いているトウカ。

「すごいアルネ。人は見かけによらないアル」

どこかズレながら驚く美鈴^{メイリン}。

「ヤバいな。とりあえず写真だ写真」

カメラを探すトウカ。やめてくれ。

「…………可愛い」

見えてないティーはペタペタ体を触つてから言つた。

「なんか負けたような気がする」

サクミが呟く。

「うう……

キクたちの目の前には薄手の黒の長袖にジーパンを着た。腰まである黒髪の美少女が涙目でへたり込んでいた。

僕だった。

「…………うう、酷い」

恨みを込めてキクたちを見る。

「し、シャレにならないですね
ち、ちょっとふざけすぎたか

キクとHIMIが僕を見ながら囁く。正直自分のこんな姿なんか見たくない。

「お兄ちゃん可愛いよ。自信持つていこう。
シル、これならお姉ちゃんですよ

「それもそうだね」

そうだねじゃないよ。自信なんて持ちたくないよ。そしてサクミ
誰が姉やねん。

「うう

もう、泣きたくなつてきた。

「可愛いアルネ～」

「可愛い」

美鈴^{メイリン}とトウカそれ以上言わないでくれよ。死にたくなる。

「つう、もひ、いいか？」

「ん～よし、じゃあ、行くか」

H///が笑顔で言ひ。

「ちよつとまじ、どこに行く氣だ！～！」

「ふつ　ふつ　ふ、外へだ！～」

「ちよつ！～　やめろ！～」

無理矢理外へと連れ出された。掃除するんじやなかつたのかよと
言ひ暇はなかつた。

第十一話 バレないことを喜んでいいのかわからない

「…………」

絶賛僕は今泣きそうです。今の状況は……言いたくはないけど女装して商店街を歩いています。ちゃんとシルたちもいますよ。

「大丈夫だよ。お姉ちゃん。誰にもわからなって」

シルが言つたが僕にはそんなこと信じられないんだよ。さすがに同級生にはバレると想つ。

「バレないバレない

シルはそういうがまつたくそつ思えない。

「大丈夫ですよ。可愛らしいですから」

キクが言つ。やめてくれ可愛らしいなんていわないでくれよ。

「死にたい」

「大丈夫、可愛いから」

「トウカもかよ~」

泣きたい。でも泣いたら目立つ。目立つたらばれる。板ばさみだ。もういや帰りたい。だが、エミがかかることを許してはくれない。

「とりあえずワタシは周り見てるアル誰か来たら言つアルヨ」

「メイリン
美鈴……」

味方が、味方がいたよ。

「でも、トオルの級友どんのか知らないね」

意味ないじやん。マイリン美鈴僕の感謝の気持ちを返してくれ。

「はあ～」

「ほらほら、そんなに落ち込まない。留守番のティーのためにもがんばらないとな」

ティーは留守番だ。盲目なのはあまり関係ないがあまり外に出しあたくないからというのが理由。危なっかしいから。といつても他人を心配する余裕はない。自分だとばれないようにするので一杯一杯だ。ん？　さてよ、そういやあ、学校の奴つてこいつらのこと知らないじやん。なんだ心配して損した。

「よう透！！」

「！？」

振り返るとそこには佳山葉がいた。つてばれた！？

「あれ、違った女だつたつて美人だ！！　いや美人と美少女と美幼女だ！－！」

あ、ばれてなかつた良かつたつて誰が美人やねん！－－　こいつ今度あつたら覚えてろよ。

「なんですか？」

声を変えて葉に言ひ。

「いや、友達に雰囲気が似てたから間違えちゃって」

僕の雰囲気がそんなにわかりやすいのか？

「そうなんですか？」

「そりなんですよ。不思議と、でも、こんな美人とあんなバカを聞違えるなんて俺どうかしてましたよ」

「」いつ今度会つたら殺す。てか、気持ち悪い。なんで口調変わつてんだよ。

「（なあ、）」いつ知り合いか？」「

HIMIが小声で聞いてきた。

「（ああ）」

小声で返す。その時失敗を悟つた。HIMIがにやつと笑つたからだ。

「なあ、あたしは」」いつの友達でHIMIでてんだがコイツに似てるつて友達つてどんな奴なんだ？」

僕を指しながらHIMIが葉に聞く。

「えっと望月透つて書つたですよ。そいつ

「ちよー？」

HIMIやつてくれたなこいつ。HIMIを睨むが知らぬ顔だ。その間も

葉は語つていいく。

「まあ、一回で三つと変や奴ですかね。俺は長い付き合いだが」「ほう、ここつ僕のことをそんな風に思つてたのか。また罪が増えたな。葉、覚悟しておけよ。とそんな僕の殺気に気づかずには話していく。

「変な奴ね~」

HIMIが相槌を打つ。お前何を考えている。

「はい、変な奴ですよ。だつていつまで経つても古くなつた物捨てないし。壊れても修理して使つじ。ビニからか壊れたものとか拾つてくるし」「へ~」

おい、シルなんだその妙に納得な顔は。つて、全員かよ。

「他にはどんな感じ?」

シルが催促する。

「今教えて上げるからね~」

「イツマジで殺してやるつか。本日何回目かの殺意を抱きながら拷問に耐える。

「でもさ、いい奴と俺は思つんだよ。だから、俺はアイツの友達なんだ」

「 そりなんですか

少しあは軽くしてやるかな。

「まあ、他にも

」

その後散々人の悪口いって帰つて行つた。訂正だかならず殺して
やる。

第十二話 掃除の続きを

女装で街を歩くといつ拷問を終えて帰宅。一時間くらいでそんなに時間はかかるないので掃除の続きをする。女装道具は捨てた。もつ一度と女装などしてたまるか。

その時その女装道具をテイーが回収していったことなどこの時の僕は知る由もなかつた。

「さて、続きやるだ〜」

「お〜〜！」

そんなわけで掃除の続きだ。引き続き物置の中にあるものを出していく。日に当ても大丈夫なものはそのまま天日にさらし、駄目なものは家中へ。一時間後ようやく全てのものが物置から出た。

「〜〜物置の中つてこりなつてたんだなすっかり忘れてた」

「お兄ちゃんすっかりつて忘れてたって

「ああ、すっかり忘れてた」

あれ、シルなんか呆れてないか？

「何年掃除してないんです？」

サクミニが聞いてきた。えつと、確か最後にしたのが　あのあとだから……。

「五年位前かな」

「ドン引きです」

「ちよ、それ酷い！！ つてそれなんかのパクリじゃないか？」 駄
田だ思い出せない。

「うわああああ……」

その時悲鳴が聞こえた。マイリン美鈴のようだびりしたんだ？

「Gアル！！ Gが出たアル！！」

「ああ、Gね。わからない人はいないと思つが一応言つておけ」
キブリのことだ。

「任せろ……」

「どうやらHIIが退治するようだ。」

モクモク

あれ何か煙たいて……

「HII、こんなところでバ サン炊くな……」

「うへわ～！～！」

「しみるです～」

急いで物置の外にでて避難する。

「なにしどんだお前は……」

「わりいわりい。まさか一気に十個使つたらこんなことになるとは思わなくてな」

「おこおこ

やばいんじゃないかこれ。なんか軽く火事が起きたみたいになつてですけど。

「あつはつは～やりすぎたか～」

「笑い事じやないですよー！ どうしてくれんですーー！」

サクミが洗濯物をさす。うわ、本當だ大変なことになつてる。洗い直しか～はあ～。

「だから、悪かつたつて」

HIIは謝るがサクミはかんかんだ。

「サクミ、HIIも悪氣があつたわけじゃないんだ許してやつてくれ「む～、わかりましたです。でも、次はないです」

これで「ひとつの方はいいな。

「次はこの野次馬を何とかしないとな」

こいつの間にか「近所さんが集まつてきていた。

「あつ、いつぱい来てるよ～」

その後何とか事情を説明し事なきを得た。まあ、嬉しい誤算としてはバ サンのおかげで虫がいつさいでこないことか。

「じゃあ、私ははわきますね」

「ああ、キク頼んだ」

物置内のホウキがけをキクに任せ僕は中にあつた物の整理をすることに。

「…………」

「ティー何をしてるんだ？」

確認しようと物の置いてある場所に行くとティーが狸の置物を抱えて座っていた。

「気に入つたのか？」

「クリと頷くティー。

「なり、やるよ」

「……いいの？」

「ああ、その代わり大切にしてやつてくれよ」

再び頷いてティーは自分の部屋に置きに行つた。

「さて、整理するかな」

いろいろものがあった。本当に自分が持つていたものかわからないうつなものまである。

「小学校の教科書か

さすがにもう使わないし使う機会もない。時には捨てることも必要だ。これからは特にな。

「捨てるカリサイクルだな。…………」めんな

束ねて紐でくくる。そして脇に丁寧に置く。

「さて、次だ」

中学の教科書。

「これもだな」

同じように紐でくくって脇に置く。

「おっ！ 皿発見」

いつたいいつ買ったのかわからないが綺麗な皿が箱に入つておいてあつた。

「美鈴メイリンいるか？」

「何アルカ？」

「これを台所に持つて行つてくれるか。一人で持ちきれないなら他の奴にも頼むけど」

「大丈夫アル」

両手で箱を持ちさらりと器用に頭でも持つている。物凄い心配なんだが。

「気をつけてくれよ」

「わかつアル」

山所へ向かう美鈴^{メイリン}。思わず耳をすませる。

「セヒト」

他には何があるかな。五年前にも一度整理はしたのだがどうやらあまり意味はなかったようだ。五年前だからよく覚えていない。

第十四話 古き電灯

「ふう、こんなもんか？」

いぬものといらないものを振りわけして整理した。と言つても。

「あまり意味なかつた気がする」

ほとんど捨ててない。まだまだ使えるものがあるわけでそれに捨てるのがもつたいたいなかつたという理由で捨てなかつたわけだ。いや、わかつてゐるんだけどね。捨てないといけないってのは。

「透さん、物置の中のそつじ終わりました。いつでも戻せますよ」「ああ、キクありがと」「いえ、やりがいがあつて楽しかつたですよ」「そつか」

さすがホウキ掃除は楽しいんだな。

「さて、あとな……ん?」

そこで僕はあるものを見つけた。

「電灯か」

昔、僕が使つていた電灯。

「懐かしいなこんなところにあつたのか

いつから忘れていたのだろうか。昔はよく使っていたはずなのに。いつの間にか使わなくなつてこんなところに置き去つてしまつてしまふれさせていた。

「綺麗にしてあげよ！」

綺麗なタオルで一瓣にほりつを拭いていく。

「よし、綺麗になった」

そして拭き終わるのを待つていたかのよつて電灯が光り輝く。そして黄色い髪の少女が現れた。

「よつやく出でられたわ～……」「ハーハー……透~お前ひうちをあんなほじりつぽいところに入れて忘れおつてからに～……」こんな乙女をほじつまみれにした罪は重いで……」

若干関西弁でしゃべる少女が一気に言い切つた。

「え、あ、ああ、『めん』

「うん、まあ、反省しどつたみたいやし、その…………綺麗に体拭いてくれたし…………」

赤くなる少女。何かそんな風に言われるといつままで恥ずかしくなる上になにか誤解されそうで怖いんだけど。

「つとど、赤くなつと場合やないで、言わなあかんことがあるんや、今まで使つてくれてありがとうな。ふふ、よつやく言えたで、これでも感謝しどつたんや、壊されて捨てられるだけやつたうちを引き

取つて使ってくれたんやからな。まあ、ほこりまみれにされたのは
ちょっと怒つたけど

昔の記憶が蘇る。そう、この電灯は昔、よく遊びに行っていた近所のおじいちゃんの家にあったものだ。幼稚園位の頃、そのおじいちゃんが引っ越しすからという理由で古いしといつ理由で壊されて捨てられるところを譲つてもらつたのだ。そうだったそれに確かあれつけたな。

「せや、透名前付けてや」
「名前ならお前あるだろ」「え？ そ、そんなんあつたけ？」
「……」

「いつ忘れるのか。まあ、いつなる前だし、しかもかなり前に一方的につけた名前だからな。忘れてても文句は言えないけど。でも悲しいな。

「そ、そんな捨てられた子犬のような目で見んといへー」「はあー、お前の名前はライだよ」「ううーん、思い出せへんなー」「まあ、いいよ、今度は忘れんなよ」「了解やーーー」

自信満々に言つライ。本当に大丈夫だらうな。まあ、昔つけたのと同じ名前だし大丈夫だとは思つが。

「で、名前なんやつたけ？」
「おおいーーー」「冗談や」

心配になつた。

「はあ、とつあえず行くわ」
「ん? どいく?」
「ほかのみんなに紹介するんだよ」
「つかとこ'ものがいながい他の女とーー?」
「誤解をまねくよつなことを言つたなーー」
「わへ、[冗談やつ]」

〔冗談に聞こえないんだよ。頼むからシル達の前でそんないとせづ
わないでくれよ。〕

「お兄ちやん~終わつた~?お兄ちやんまたなの?」
「ああ」
「む~、まあ、お兄ちやんだから仕方ないか」

シルなんだその僕だから仕方ないから私たちが諦めますよ的な發
言は。

「かわええ~!..」
「きやあああああー!..」

これなつライがシルに抱きつく。

「ああもひ、めひちやかわええな~! ひつ、ひつ」
「ひひやーーー!..」

「ライによつもみひちやにせられるシル。ひとつ発見ライつて可愛い
もの見るどめひちやに可愛がる。見てる分にはほほえましこが

そろそろ止めるか。シルが助け求めて」つち見てるし。

「ほり、ライそろそろやめとけ、紹介が出来ないし、シルが嫌がつてるからな」

「はー、あかん、つい体が勝手に、ごめんな~」

「うう~」

「はいはい、よしよし」

ちょっと涙ぐむシル。そして僕の後ろに隠れる。

「そんな姿もかわええな~」

そしてまたく反省する氣ゼロのライ。

「どうしたですか？」

「…………うるさい」

シルの声を聞きつけてサクミとティーがやつて來た。遅いだなんてツツ「!!はなしだ。しかし、この二人はちょっとまづい氣がある。

「二人もかあいい~!~」

案の定ライが一人に抱きつぐ。そして二人はシルと同じ道を辿った。

第十五話 紹介するだけで疲れる

「いやー、すまんすまん。ついな」

ライからティーとサクミを助け出したあと正気に戻ったライが言った。

「何がついだよ」

そのおかげでシル、サクミ、ティーの三人とも僕の後ろに隠れてしまっている。まあ、隠れ切れてないんだけど。

「危険です。身の危険を感じるです」

「.....」

あらり、すっかりおびえちゃってる。

「ほら、お前ら大丈夫だから出る。紹介できないだろ」

おずおずと三人は僕の後ろから出てきた。

「電灯のライやよろしくなー」

ライが元気に行つた。

「シャーペンのシル」

「ラジオのティー」

「洗濯バサミのサクミです」

おずおずと二人も自己紹介する。

「あ～かわええ～」

「抑えろライ」

「わ、わかつとむ」

抑えないとまた同じことの繰り返しだからな。でも、あまり抑えられそうにないな。

「じゃあ、ちよっと待って他の奴らを呼んでくるから

もう一回つづりコンビングを出る。

「ああ～もう、我慢でけへん～！～！」

「きやああああ！～！」

「.....」

「ここみわああ～！」

三人の悲鳴が聞こえた気がするけど幻聴だらうな。うん、空耳だ。だつてそんな声聞こえないし。うん、そうだ幻聴だ。
ごめんシル、サクミ、ティー。あとでケーキ作ってやるからな。それで機嫌直るだらうし。うん、よしそうしよう。

絶え間なく聞こえてくる悲鳴を考えなにように現実逃避して僕はエミたちを呼びに行つた。

「お～い

「お、なあ、見てくれよこれ

部屋にいたエミが叫ぶ。

「なんだ？」

「これこれ」

見るとそれは。

「お前どじでそんなの拾つて来た！！」

「そこの『△』捨て場。中々いいぜ～」

HIMIが拾つて来たのは俗に書いH口本である。親父かお前は。て
か、何で拾つてきてんだよ。

「勉強」

「なんの勉強をするつもりだよ

「そんなのわかつてるだろ」

わかつてゐるがそんなの信じたくないし。

「そんなことより、リビングに行つてくれ

「お、新入りだな。行つてくるぜ」

「ああ」

さて、これでシルたちは助かるだらう。下手をすればHIMIとトライ
で更に酷いことになるという可能性を完全に度外視した。

「さて、次だ次

トウカの部屋にいく。

「トウカー？」

「なに？」

「いや、新しい家族が増えたので紹介するからリビングに行つてくれないか？」

「そう」

トウカが僕の脇を通り過ぎる。

「…………裏切つたら刺す」

物騒なことを亥いていった。

「怖！－何、なんなの？ 裏切るつて何が？」

意味がわからない。

「と、とつあえず氣をつけよ！」

その時。

「クール――――！」

「きやああああああああ――！」

意味不明な叫びと悲鳴が聞こえてきた。

「トウカの叫び声初めて聞いたな」

さて、次は美鈴^{マイリン}だな。部屋にいるかな。台所にはいなかつたし。

「お～い、美鈴^{マイリン}！」

返事がない。

「ねかしになどいりいるんだ？」

「あれ、何してるアル？」

「美鈴どーんじたんだ？」呼んだけど返事もなかつたし

「さうか」

卷之三

何をしてたんだろうか。
気になるが今はライのだな。

「リビングに行つてくれないか？」

「わかつアル、新入りアルネ」

二十九

美鈴もリビングへとむかつた。

何か下で叫びとか聞こえるけど氣のせいだよなたぶん。

「…………これは悪戯に被害者を増やしてゐるだけじゃないのか?」

やめよ! 本物。あれのだけをやめよ! ドル、あと
が怖いな。

「さて、最後はキクだな。あゝいキク すみませんでした！！」

キクの部屋のドアを開けた途端一瞬で閉めた。キクは着替え中でした。危ない危ないもう少しで見えるところだった。見えてないよ

見えてない。断じて見えてないから。

「あ、あの透さん?」

「見てない、断じて見てないから」

「あ、いえ、着替え終わつたので入つてきてもいいですよ」

「あ、ああ」

許可が出たので入る。キクはきちんと着替え終わつていた。まあ、当たり前だけど。気にしてないみたいだし。

「それで何か用ですか?」

「ああ、リビングに行つてくれないか?」

「新しい方ですか?」

話が早くて助かるな。他の奴らも早かつたけど。

「ああ、行つてくれるか

「はい」

キクが部屋を出て行つた。

「はあ～ようやく全員呼べたよ。なんか疲れた。無駄に」

さてと、それなら僕も行かないとな。たぶん大変なことになつてると思ひし。

僕は階段を下りてリビングに向かつた。

古道具屋古幻堂。

「ふむ、酷い」とじやな

源さんが女性の言葉を聞きながら呟つた。

「はい、彼は常軌を逸してしまいます。そのままでは彼に使われるモノが可哀想です」

女性が悔しそうに顔をしかめる。

「かと言つてわざが出来る」とは見守る」とじや。手を出す」とは出来ん

「…………絶対の禁ですね」

「ああ、破ればお前たちが消えてしまつ。それはわしには耐えられん」

源さんは女性の手を握りしめる。

「あー……」

そこにツインテールのロリット娘が入ってきた。

「カズハお姉ちゃんまたズルしてーーー！」

「い、いえコズハこれはーーー！」

カズハと言われた女性は急いで源さんの手を離し弁解を述べよう

とするがユズハの方が早かつた。

「みんなカズハお姉ちゃんがまたズルしてるよーーー！」

ユズハの一言で店の奥から六人の女性たちが出て来た。

「お前またかよーーー！」

赤いくせつ毛でジー・パンの女が言った。

「い、いえ、アキハこれはその」

カズハは慌てる。

「…………」

じつと無表情でカズハを睨む長い黒髪を引きずっている少女。

「な、ナズナもそんな怖い顔しないで」

ナズナの無表情に恐怖を感じるカズハ。

「ねえ、ここで今すぐ死ぬか。全裸で町中を歩いてから死ぬかどう
ちがいい？」

白髪で黒服をきた女性が言った。

「ナツハそれ結局死しかないーーー！」

カズハ結構限界である。

「今からネットにカズハの恥ずかしい過去とか自慰の映像を公開するです。安心するです。プライバシーだけはprotectです」

「つづまきメガネをかけて陰湿に笑っている少女が言った。

「ウキハ！。それだけはやめてください……！」

「いつの間に撮られたのか恐ろしい。

「や、やつぱり喧嘩はよ、良くないです。だ、だから一週間源さんと話すのを、禁止にしたらどうかと」

白のワンピースをきた氣弱そつたな女の子が言つた。羊みたいなイメージがある。

「ゆ、ユキハ、それ嘘でしょ」

ユキハの意見に絶望するカズハ。

「アハハハハ殺しちゃおつか」

狂つたように笑う少女。

「い、イクハお願いですから正氣に戻つて」

マジ泣きのカズハの懇願。

「これこれみんな仲良くなんか」「はーい』

全員が素直に頷いた。

(ふう、お前さんはわしによく似ておる。だから、奴なんかに負け
るなどじゃないぞ)

源ちゃんは来るべ戦いにっこを馳せた。

第十六話 魔書？ そして姉現る（前書き）

そろそろストックがなくなってきた……。

第十六話 魔書？ そして姉現る

僕は意を決してリビングへと突入した。そこはまさに人がみてば
いけない領域だった。そしてこの世界の言葉で表す最もな言葉は阿
鼻叫喚の地獄 ではなくただの桃色空間だった。

僕は絶句した。何があつたのはわからない。ただ唯一一つのなら
まさしくそこは人が見るには早すぎる光景だと言つことだ。

そんな異世界と僕は戦つた。つらく長く厳しいわけではい戦いだ
った。そして目的である自己紹介を行つたのだった。

今は全員リビングのソファーに座りとくに僕の周りでコラックス
したかのようにしている。

が実は全員気力切れで死んでいただけだが。

「あ！」

そんなときキクが声を上げた。

「どうした？」

「忘れていました。透さんに見せるものがあるんでした」

キクが客間に入つていつて古びた革表紙の本を持ってきた。

「これが物置から出でてきたのです」

本は鍵がつけられ厳重に封印されていた。

「いつたいなにがかかるてるんだ？」

「わかりません」

まあ、こんな風に厳重に封印されてたらわからないよな。

「うん。鍵とか一緒に置いてなかつたのか?」

一
はい、
これだけでし
た

どうしようもないな。鍵がないんじゃ読むこと出来ないし。

「へん、どうしていつもないな

「左様ですか。なら処分しますか?」

いや持つておこなへ大事なものだと思ふ」

ピンポン。

その時チャイムがなつた。

「ん、誰だ？」

誰か来たみたいだ。

「うそだよ。お前が何をやるかわからん。

「はい」

僕は立ち上がり玄関へと行く。

「はい」

扉を開けると、さなり僕の前が暗くなつた。

「ふー」――。

そこで誰かに抱きしめられたところへ、口元がついた。やわらかい感触が顔面を覆う。

「も～会いたかったわ～透～！」

「」、この声は――？

「ちよ、離せ…… 息が……」

「あ、『めん』『めん』

ようやく僕は解放された。

「ふう、何しに来たんだよ。姉さん」

このスタイルの良すぎな女は僕の実の姉、望月優香むちゅう ゆうか。マイペースでブランクである。やめてほじりものだけだ。

「何つてまつたく連絡をくれないんだもん。お父さんたちも心配してんだよ」

色々あって確かにこの頃連絡は出来ていなかつたから何も言えないな。

「色々あつたんだよ

「ふーん、で、透から知らない女の子の匂いがしてるんだけど色々つてそれに関係ある?」

「な、何のことだ?」「

匂いがわかるってどんな嗅覚だ。犬かよ。…………でも、そうだ
な紹介するなら今だな。

「まあ、連絡できなかつたことに関係がある」

「わつ……怒らないから言つて見なさい」

いやいや、もう怒つてるじゃん。顔は笑つてるけどまつたく目が
笑つてないよ。これは確実に姉ちゃんは怒つているときの反応だ。

「えつと、そうだね。…………ほひ、ここ民宿だつたじやん」

「そうね……だから?」

やばい、物凄く怖い。でも言わなくちゃ。たぶんティーがこれを
聞いてるはずだから状況は向こう方に伝わってるはず。そしたらキク
が何とかしてくれるはず。とにかくしてくれなければ僕が終わる。

「だから……受け入れたんだよね」

「何を?」

わかつてゐるくせに。やっぱり自分で言わなきゃいけないんだな。

「入居者……」

ピコン――

言つた瞬間僕の頬を何かが掠めた。それがナイフだとわかるまで
に一秒くらいかかった。

「え……」

何もいえなくなつた。姉さんが僕の首筋にナイフを突き立ててい
たからだ。……やばい、ヤンデレだよ。これ。話に聞いたヤンデレ
だよこれ！！ たぶん。

「ねえ、それ、どうこう」と……つまり、今アンタその何人かの女
の子と暮らしていくことじょ……？

黙つて頷く。事実だし隠しても意味がない。てか、もう全部わか
つていいはずだ。

「ま、まあ、そうなるかな
「ふうん」

「怖い。これは死ぬかも。

「何で、隠してたわけ」

「いや、隠してたわけじゃないよ。ちょっと忙しくて連絡できなか
つただけでそれに困ってる人たちだつたし……」「……」

姉さんがナイフを引く。た、助かったのか？

「はあ～まあ、透の性格を考えたら頼まれたら断れないだろうし。
透なら何も出来ないだろうし」

「そうそう……！」

あまり肯定はしたくないけれど今回ばかりはしかたない。

「それで、紹介してくれるんでしょ」

「うん、紹介するよ。じゃあ、上がって」

「ほーい、おっしゃましまーす」

ふつ、なんとか恐るしげにフレッシュシャーから解放された。とりあえずリビングへと姉さんと共に向かったのだった。

第十七話 モノたりせりやれば出来るんです

リビングへ僕は姉さんともに恐れおののきながら向かった。ちゃんとこまかせるような状態になつてゐるのか心配だ。物凄く。これでごまかせる状態でなかつた場合僕は死ぬな。今のうちに遺書でも書いておこうか。いや、とりあえず聞いていたと思つティーを信じよう。うん。よし。

「透どうかしたの？ さつきから様子おかしいけど」

「い、いや、別におかしくないよ」

「そう？」

ふう、危ない。落ち着こう。こうのは僕が落ちついてないと駄目なんだ。

「それで何人いるの？」

「えっと八人かな」

「へへ」

そしてリビングに入る。

「あら、どなたですか？」

キクが入ってきた僕と姉さんを見て言つた。そこにはキクとシルしか居なかつた。どうやら、自分の部屋に戻つたようだ。さて、どうするんだろ？

「どうも、透の姉の望月優香です」

「ああ、大家さんのお姉さんですかどうも。私は白木野菊しらぎやきくと申しま

す。」の子は詩瑠で私の娘です。ほり、詩瑠挨拶「
「ほ、はじめまして」

シルはキクの影に隠れながら言った。親子設定か。うん、あつて
る。適任だよ。まあ。あつこと思つた。

「はじめまして、えつと、菊さんはどうして透のところへ。
「はい、夫と離婚して行くところがなにところを透さんにいつも来て
ないかといわれておかげで路頭にまよわないですみました」
「そうですか、アンタそういうなら呼べ言ひなせ」とつづけまつ
たくいことするわね」

ふつ、よかつたまかせたな。なんとかなるな。この調子なら。

「お~い、透、誰か来てるのか~?」

HIIがリビングに入ってきた。

「お、誰だ、その姉ちやんは?」
「えつと姉さんだよ」

「望月優香よ」

「そつか、あたしは波佐見絵美。はさみえみ大学生だ。いや~、安く住めると
こがなくとも、困つてたところを透に拾われてな

おお、HIIもちやんとしてる。なんか後ろでキクが睨んでるけど。
めつぢや言つて聞かせたんだろ?」

「そうなんですか」

「なんですか? 姉さん、なんの騒ぎです」

サクニがやって来た。

「おー、朔美。^{さくみ} ちょうどいとこにきたな。あの透の姉が来てるぞ」「はあ、姉さんもう少しよとなしくしてください。ただでさえ大家の透さんには迷惑かけてるんですから」

「こいつらが姉妹って結構問題なくないか？ 姉さんもさすがに疑うだろ。

「いいのよ、透が迷惑するだけなんだから。どんどん迷惑かけても」「だよな～」「姉さん。とりあえず礼儀を知れです」

…………『気がついてなかつた。明らかに似てないだろ。HIII、髪赤いんだぞ気づけよ。いや、気づくな。

「まつたく。『めんなさいです大家さん』
「いいよ。いつものことだし」

話してくるとトウカが入ってきた。

「こんにちわ」「

「こんにちわ。あなた高校生？」

トウカが頷く。

「桃香、姉さんの望月優香だよ」

トウカに僕は姉さんを紹介する。続いてトウカも自己紹介をした。

「氷野桃香。高校一年」

「そりなんだ。透と同級生なんだ」

「そんなとこ」

「まぐしまかしてくれてこる。助かるよ本当に。このまばれな
いでいてほしい。

「へへ、あんたこんな可愛い子がいてないもしてないとかおかしく
ない?」

いや、してたら姉さんが僕を殺す的な」とつてませんでしたか?

「ただいまアルーーー!」

話していると美鈴の声^{メイリン}が響いてきた。どうやつて外に出たんだ?
玄関で姉さんと話しているときには気づかなかつたぞ。

「お、オオヤの姉貴アルカ? ワタシ美鈴^{メイリン}言つね。中国から来たア
ル」

「へえ、留学生なんだ」

「そりアル。金なくて困つてるとこ助けにもらつたアル
「やうなんだ。つて」とは中華料理食べ放題ー?」

姉さん……もつとほかに聞くこととこつか食いつくとあるでし
ょ?」

「確かに台所は週に一回は押当つてゐるアル

「つらやましいぞ透~」

「やめる、小突くな」

姉さんから小突かれていたとライとティーがやつて来た。この一番説しそうい二人をどうするのだろうか。とりあえずティーは「ゴーグルをどこかにおいてきたらしい。いまは持っていない。

「なんやなんや、楽しいそなことになつとるな～」

「…………誰？」

ティーとライだけど一体どんな顔になつて居るのだらうか。といふか明らかに日本人ではないけど留学生にするのか？

「おお、透の姉貴やな。うちはライ・トワイライト。関西人や……で、こっちの無口なのがティー・レイテオうちの相方や」

「……ナニテヤネン」

…………。物凄いものを僕は見ている気がする。といふかティー物凄い棒読みだなおい。

「まさか、芸人がいるなんて！？」

姉さんの頭はいつたいどうなつていてるんでしょうね。

「とまあ、そんな冗談はさておき。透から話は聞いとるで……」

「…………」

なんか色々あつたがとりあえずこれで全員紹介できたらな。

「これで全員だよ」

「アンタもお人よしよね」

「つむかこよ。それは自覚してる」

まあ、普通の理由ではないし。もともと全員つむぎいたんだけ
ね。姉さんも見たことあると思つんだけど。こうなる前は。

「まあ、でも、安心した。悪い人かも知れないと思つたけどみんな
良い人みたいだし」

「そうだよ、みんな良い人たちだよ。だから、何も心配することな
んてないよ」

「そうね」

「こうして無事なんとかモノたちの正体がバレることなく僕の命も
無事に紹介し終えたのであつた。やるときはきちんとできるんだな
と実感した。」

第十八話 開本

「それで、姉さんは結局のところ何をしに来たの？」

モノたちを紹介し終えたあと落ち着いたところで姉さんに聞く。

「言つたでしょ。様子見に来たの」

「それなら電話でもいいだろし。去年は連絡しなくても来なかつたし」

「それなのに今年はなぜか姉さんが來た。きっと何か理由があるのだ。

「まあ、透ないうちにいつと戻つたけど。今回はこれよ」

姉さんが胸の谷間から鍵を取り出す。なんてとにかくいれてんだあんたは。

「だつて、ここなら盗まれないでしょ」

そういう問題ではない。といつか盗まれなくとも落としたらどうするんだよ。

「大丈夫。落ちるわけないわよ」

まあ、そうですね。ボリュームがすごいですもんね。

「で、何の鍵？ というかなぜに鍵もつってきたの？」

「んつとね、透は叔父様のこと覚えてる？」

「確かに小さい頃に何回かだけ会ったことがあるよ。ナビやのあとすぐ亡くなつたし。あまり覚えてないな」

僕の叔父は骨董品の収集家だったようで。珍しいものを集めてはコレクションしていたらしい。それに物持しが物凄くよかつたらしくどんなものでも大切に使っていたそうだ。僕のその辺りの性格は叔父譲りだと親戚からよく言われる。

「そうね。でね、亡くなつたときは当然遺言があるでしょ」

「そりゃ当然だね」

「それで、遺言の中に今口の戸の鍵を透に届けるように書いてあつたのよ」

それで様子見ついでに届けにきたってわけか。

「だから、はい、これ」

姉さんから鍵を受け取る。黒くて古い鍵だ。よく映画とかで城の鍵とかで出てきやうなやつ。

「さて、じゃあ田代も果たしたし。あたし帰るね」

「部屋あるから。泊まつてけばいいのに」

「わざしたいのはやめやめだけだけど」

ウインクする姉さん。

「これから、会うんなの〜」

へへ珍しそうな姉さんやうごうの興味なやうにしてゐるの〜。

「つ～ん、どうしてもって頼まれちゃってね～。大丈夫。あたしは常に透のものだから」

「謹んでお断りします」

姉さんは負担にしか鳴らないと思つかうな。

「まつたく照れちゃって。じゃあ、行くわね」

姉さんはそれをと出て行つた。そしてすぐ戻つてきた。

「もうもう、近々父さんたちが迎えに来るからって」

「はー?」

「伝えたからね」

そしてまたすぐ出て行つた。

「ちよっとだけひこり」とだよ……

すぐに追いかけたが姉さんの姿は既に消えていた。

「早によまつたく」

とりあえず来る前には連絡があるだろうからそのときに考え方。まずはこの鍵だ。なんとなくうちにあるものでこの鍵が合致するのはあれしかない。

「お兄ちゃんのお姉ちゃん凄い人だね」

シルが言った。

「嵐みたいだつたよ」

「そうだな、まあ、人前だからあの程度なんだけどな」

「ところでは普段はもつとす」ことと思つていいんです?」

サクミが言つたので頷く。

「恐ろしいです」

「さうか? あたしとしては面白かったけどな」

HIIIからしたらタイプ同じだらうからな。

「それよりも透さん先程の鍵は」

「ああ、たぶんキクが思つてゐる通りあの本の鍵と思つ」

それ以外に思いつくものはない。ビックの隠し部屋の鍵とか言わ
れたらどうしようもないけど。

「試してみたら」

トウカの言つとおりまずは試さないとな。

「ほれ、モテキタアル」

美鈴メイリンがあの本を持つてきてくれた。

「よし、開けてみるぞ」

リビングのテーブルの上に本を置き鍵を鍵穴に差込回した。

ガチャリと何かが開く音と共に僕の視界は全て白で埋め尽くされ

た。

第十九話 記憶の書

そこはどこかの屋敷だった。屋敷の周辺は山に囲まれている。山の向こう側は真っ白で何もない。ただ、真っ白な空間にこの山に囲まれた屋敷は存在していた。ただただ、空虚な空間の中では圧倒的存在として君臨していた。その中庭と思われる場所に僕は立っていた。

「ここは……どこだ？」

僕はさつきまで家のリビングで姉貴が持ってきた鍵を使って厳重に封印が施されていた本をあけたと言つか鍵を回しただけなのだ。こんなことも知れない屋敷に……。

「いや、見覚えがあるような……」

この屋敷には昔来たことがあるような気がする。中庭の噴水、重厚な門の装飾、植えられた薔薇。そのどれもが見たことがあるような気がしていた。それがいつどこでだったのか思い出せないが。この屋敷には昔来たことがある。

「まあ、気のせいかもしねないな」

山の向こうが真っ白い空間だし。明らかに現実味がない。人っ子一人いないのだから。現実かどうかも確かめようがない。

「お~い、シル~！」

返事はない。シルは近くにはいないようだ。

「キク、トウカーーー！」

これまた返事がない。この一人もいない。

「H//、マイラン 美鈴ーーー！」

返事がない。

「サクミ、ティー、ライーーーーー！」

耳をすませるが返事は聞こえない。下手をすれば山彦で僕の声が帰つてきそうな静けさすらある。

「返事がないならここにいるのは僕だけか」

さて、どうしたものかな。あいつらなら僕がいなくともなんとかなるけど。僕としては誰か一人でもここにいてほしかったよ。僕一人じゃ何もできないからな。

「とりあえず屋敷の中に入つてみるか。外はなにがあるかわからなーいし」

それは屋敷の中も同じだがどの程度の広さかわからない外よりはどの程度かわかる屋敷を探索したほうが安全だろう。それに誰か人がいるのかもしれない。叫んでも誰も来なかつた時点で望み薄だけだ。

屋敷の扉に鍵はかかっていなかつた。扉はきしむことなく開いた。エントランスには豪華な装飾がなされていた。シャンデリアなんて

はじめてみた。さすがに実家でもシャンティリアはなかつた。

「お~い、誰かいませんか~」

し~ん。

「…………返事なしか

誰もいなかそれとも広すぎで誰にも聞こえていないのか。

「とにかく探索だな」

ゲームとかでも「いつこいつは探索をするものだ。なにか役に立つものがあるかもしねり」。

「とこつてもどいをどいつせばここのやう」

大体たんすとかを探れば色々出て来るんだろうけど。どいに行つても迷いそなんだよな。馬鹿でかい屋敷のエントランスも当然の「とくでかいためどい」から手をつけて良いのかわからない。

「とつあえず一部屋ずつ見ていくか

左の方にあつた扉を開ける。かなり広い廊下に出た。

「こきなりたいへんじやねえか

どう、考へても一人で探索するには広すぎるだろ。モノたちがいればなんとなるだろ? けど、「こきない」。

「いよいよにその力を期待してもダメか

それにしても広いな。いつたい誰が作ったのや。そういう金持ちだらうけど。

「それにしてもどいかでみたことがあるな、本當に」

廊下の端に階段があつたので上る。部屋の中には何もなかつた。ただ、綺麗に手入れされて寝室などの部屋ばかりだったのだ。だから、階段を上がる。一階も同じような感じであつたので三階へ上がつた。

三階には部屋はひとつしかなかつた。他の扉よりも豪華であつた。おそらく当主の部屋だったのではないだらうか。

「ひるなら、誰かいるかもしれないな。入ってみよう

一応ノックして入る。そこには桃源郷が広がっていた。

第一十話 叔父

中はかなり広い書斎で本棚は天井まで届いていた。一部屋ではなく一部屋ほどあるらしく扉がある。

……わかつてゐるよ。少しくらい現實から目をそらしたかつただけなんだ。見たものがすごすぎて。「うん、やっぱすぎて。

そう、僕の目の前は桃源郷が広がつていた。意味がわからないか？そのままの意味だ、簡単に言えば裸の男にたくさんの裸の女が群がつてゐる。これだけなら、問題はないだろ？「え？」問題だって、まあ、までこの不思議空間の中ではあまり問題にならないという意味だ。人がいるんだからな。問題のは、その男だ。まったく俺と同じ顔をしていた。いや、よく見ればどこか違うような気がするが、さすがに凝視できるような状態ではない。

「ほり、これはどうだ？」

「あんつー、い、いいです」

よし、逃げよう。これ以上いるとまずい。いや、最初からまずい。部屋を出ようと振り向いた。

「待てよ」

僕より少し低い声で呼び止められた。やつぱり逃がしてはくれないんだ。ゆっくりと振り返る。そこには先ほどと同じ桃源郷が展開されているが、がんばって目に入れないようにする。

「なんでしょう」

「せつかく会えたのにどうしてついつてんだよ」

この状況でどこかへ行かないほうがおかしいだろう。それとも、僕の方がおかしいのか？　いや、それだけはないと思いたい。

「い、いや、邪魔かと思つて」

「ふむ、まあ邪魔かといえば邪魔なんだが、せつかく孫が訪ねてきたんだおいかえすわけないだろ」「なんだ？」

「ん？　さつきこいつはなにを言つた。孫？　つまりこの桃源郷の主である僕もどきは俺の叔父さん？　いやいや、まさか、だつて僕とさほど年齢が変わらないぞ。確かにここはよくわからない空間だからなにがあつても不思議じやないけどわ、さすがにありえんだろう。

もう一度目の前の僕もどきを見る。驚いたことに桃源郷は消え普通の格好に戻つていた。よかつたよ本当に。

「それははどういうことなんだ？」

「だから、俺はお前の叔父だ。お前にわかりやすい姿で出てきてるんだ」

…………。えつと、つまり、こいつが僕の叔父、そういうことだよな。信じられん。父さんたちに聞いた話によれば、優しい人だと聞いたのだが。モノをいつまでも大切にする人だと。だが、目の前の叔父（仮）はイメージとはかなり違う。

「…………」

「信じてないだろ。まあ、俺も、昔は信じられなかつたがな。それで、モノたちとの生活はどうだ？」

「なんで！？」

なんで、そんなことを知つている。死んだはずの叔父が知つてい

るはずない。

「不思議に思つてゐるな」

「誰にも言つてないのにどうして」

「簡単な話だ。俺もお前と似たような状況に陥つたことがあるからな」

「なー?」

そんな話は初耳だつた。叔父が僕と同じ状況に陥つただつて、それはつまり、ものが擬人化したことだ。同じことが昔もあつただと。驚き以外のなにものでもない。

「やつぱ、知らなかつたか。まあ、誰にも話してねえし。さて、じやあ、俺も仕事するかな」

「仕事?」

「ああ、お前に全てを話すといつな。まあ、すぐに全部は話せないが、なんで、ものが擬人化してモノになるか、お前に話してやるよ」

この叔父は一体何を知つてゐるのだろうか。遂に叔父の口から語られる。

間章 四（前書き）

この間章四には、皆様を不快にさせる表現がたくさん盛り込まれています。別に読まなくても大丈夫な話ですので、苦手な方は戻つてください。

誤字など修正。更に鬼畜度アップ。

少年は足で女の頭を踏みにじつて笑っていた。しかも、靴の裏には鏢と画鋲が仕込んである。見れば、少年が座っているのも女だ。手足を釘で床に縫い付けられ、更に腹の下には、突起がおいてあり、少しでも力を抜けば刺さるようになつてゐる。ほかにも部屋の中にはたくさんの方がいた。

爪をはがされた女。目をえぐられた女。歯を無理矢理抜かれ釘を刺された女。耳に工具を突っ込まれ溶けた金属を流し込まれた女。耳をそがれた女。鼻をそがれた女。手足を釘に打ち付けられ磔にされた女。指を切られ、代わりにドライバーが刺さつてゐる女。腕と足を切られた、代わりに材木が刺さつてゐる女。体中に針が刺された女。焼けた鉄板の上に乗せられ、肉の焼ける匂いを漂わせる女。巨大な鉄球に潰されている女。鈍器で殴られ続ける女。ピラニアの水槽に入れられ、少しずつ喰われる女。強力な電気を流れ続ける女。陰部に赤く燃える火かき棒を突っ込まれた女。みんながみんな酷い状態でからうじて生きていた。

一部の女だけが、酷い状態の女たちを見下して、快適に過ごしていた。

「おうおい、そんなんでいいのかよ。あ？ お前にプライドはないんですかあ？ 馬鹿なんですかあ？ なあ、言つてみろよ。ほら、言えよ」

足でぐりぐりと女の頭を踏む。鏢ですれ、画鋲が刺さつても女は、床にはいつくばつたまま何も言わない。目には生氣の欠片もない。そんな女の反応が面白くないのか、少年はナイフを取り出す。

「さてと、ビ・ニ・に・刺・そ・う・か・な。こじだ」

手の甲に刺す。女は苦悶の表情を浮かべるが言葉は発さない。そういう命令だからだ。少年の命令はたとえどんなに残虐なことでも従わなくてはならない。

少年は、面白くなれやつてある。

「つまんねえ。なあ、お前、面白っこじしりよ。おこ

ぐりぐりと、踏みにじる。仕込まれた鑪で女の頭が削れ、画鋲により擦過傷を作り、血が出るが、少年は気にしない。

「何か言つたらどうだ」「……」

それでも、女は何も言わない。

「おこ

少年が執事を呼ぶ。

「はい」

すぐに呼びかけに応じ、老執事がやって來た。

「なにか御用でしょうか」

「はやみ、もつてこい。切れ味悪い奴な

「かしこまりました」

一端部屋を出て行く執事。すぐにはやみを持って戻ってきた。

「ビハビゾ」

執事が少年にはさみを渡す。はさみを受け取ると、少年が踏みつけていた女の髪を引っ張り、起こす。

少年は無理矢理、女の口を開け舌を引っ張り出す。

「最終勸告です。何か言えればやめてやるよ～。喋らないなら、いらない舌を切り刻んで、切り落としてやる」

女は何も言わなかつた。別に喋れないわけではないのに、喋らなかつた。それが命令だつたから。少年の言つて言ふことは理不尽以外のなものでもない。

「ふ～ん、じゃあ切るわ。まあ喋つても切り落とすけどねえ！」

少年は女の舌にはさみをあてがい、笑いながら閉じた。女の体が痛みで震える。だが、完全に舌は切れない。だから、少年は何度も何度も、はさみを閉じる。笑いながら、何度も何度も。ようやく舌が切れた。女はショックで失禁していた。

「まだだよ～。そのままじゃ死んじまうからなあ、優しい、優しい俺は対策を用意したんだよ～」

少年が釘とハンマーを取り出す。そして切つて残っている舌を釘で押さえつける。

「舌を切ると巻き込んでちりそくするからなあ、だから釘打つて止めちまお～」

そして舌を下顎に打ち付けた。氣絶から無理矢理叩き起こされた

女がのたうち回る。

「ヒヤハハハハハ！ 傑作だなおい！」

「次！」

「坊ちやま、それで最後です」

「チツ、そつか」

少年はつまらなそうにする。

「ねえねえ、マスター」

快適に過ごしていた女の一人が甘い口調で言つ。金髪赤眼で、髪をツインテールにしている女だ。

「今度は私たちの相手してくださいよ。もう、マスターを見るだけで、私濡れてしましましたわ、ほら」

金髪の女はスカートをたくしあげ秘所を晒す。

「……ワタシモヌレタ」

ウエーブのかかった紫髪の少女が片言で言つ。こちらははなから隠す気などないのか、布を巻いているだけだ。今はそれを外してい る。

「ニヤハハハハ、うちもつちもー！」

猫のような雰囲気のある、赤髪の少女が笑いながら言つ。

「…………わたしも……」

海のようなコバルトブルーの髪と瞳の少女も立つ。

「私は、どうでも良いわ」

茶髪ショートヘアの少女は氣のないよひに立つが、ビリとなく期待した感じだ。

「そうだなあ、壊すのも疲れたしい、今度はぐらぐらにしておかるかあ」

少年は女達と部屋を出て行った。酷い状態の女たちは、そのまま置かれていた。

間章 四（後書き）

書いてて殺したくなつたキャラは二つが初めてです。この鬼畜外道。

自分的に結構鬼畜に表現したのですが、どうだつたでしょうか？
ぬるすぎだとか言われそうですがこれが限界です。すみません。
しかし、この鬼畜外道（仮）君。まだ名前、決まってないんですね。
というわけで、名前募集します。悪役っぽい名前を募集。当選
は、あとがきで、お知らせします。

「さて、何から話すか」

最初から全て話してほしいけどね。まあ、何かそれは無理そうだな。なんとなくだが。

「出来れば全部話してほしつて顔だな」

「ワケがわからないからな」

「そりやそうか、俺も最初はそう思つたからな。やうだな、まあほ、ほ、

びつして擬人化が起こるかだな」

やうやくだな。

「とつあえず座るといーー

叔父が椅子に座る。僕も向かい側に座る。じやあ、聞かせてもらおつか。

「さてと、俺名乗ったつけ?」

「? 名乗つてないんじやないのか? でも、名前は知ってるだぞ」

「あー、うーではそれダメなんだよ。詳しく述べなさいけど

なんだそりゃ。せ

「よーし、じやあ、俺の」と、銀一とでも呼んでくれ

なぜこ、銀一。でか、どうからそんな名前出してきた。

「よし、じゃあ、話そつ

銀一が語り始めた。

「九十九年に一度、物を擬人化させることの出来る人間が一人現れる」

「二人？」

一人は僕だな。つまり、もう、一人どこかにいるわけか。こんなビックリな人間が二人もいるのか。……自分で言って、ちょっと悲しくなった。

「ああ、そうだ、それで、九十九年前には、俺ともう、一人が選ばれたわけだ」

「だが、なんでそんなのが選ばれるんだ？」

「それはな、世界を書き換えるためだ」「は？」

世界を書き換える？ どういうことだ。いや、つまりはそういうことなんだろう。そのままの言葉の意味なんだろう。世界を書き換える。つまりは、自分の好きなような世界を作れるってことなんだろう。だが、何のために？ 誰がそんなことを始めたんだ。

「それは、まだ、言えないな。人間とは違う高位の存在だとしか言えない。この空間もあいつが作ったものだしな」

「あいつ？」

「まあ、それはいい。それで、モノを擬人化させることの出来る俺たちは、九月十九日より、大いなる意思により、戦うことになる」

な、なんだって！？ 戦うだと。つまり、あいつらは戦うために

生み出されたところことなのか。

「端的に言えばそうなるが、モノたちとは、世界が与える駒だ。それをつましく使い、相手を倒し、資格を奪つ。そうすることにより、どちらか一人が世界を書き換えることが出来るようになる」

「つまり……」

つまり、いざれば、あいつらと共に僕は、戦わなければならなくなるところとか……。もつと、驚くかと思ったが、それでもなかつた。どうやら、僕は、初めからなんとなくわかつていたようだ。ただ、そんなことを考えた奴をぶん殴りたくなつた。どうして、あいつらが戦わなくてやいけないんだ。

「お前の思つてゐる通りだよ。やつこいつことだ。まあ、俺も昔はそういうふうに思つたよ」

「それなら、銀一はどうしたんだ?」

「俺は何もしなかった。いや、出来なかつた。絶対の禁をやぶれば、あいつらが消える。そんのは俺は嫌だつた。これは言い訳だ。だから、お前が代わりにやれ、俺に出来なかつたことを、俺が見れなかつたものを見せてくれ」

そんなこと、言われたつて。まだまだ、わからないことだけれだつていうのに。それでどうしろっていうんだ。

「確かに、だが、それでもお前にしか出来ないことだ。それに、嫌でも戦うことになる。心しておけ。っと、やるそろ時間だな」

屋敷全体にひびが入る。

「ちよつと待つてくれ…… 僕はビリしたらこう……」

「お前の好きなようにせれ。俺はまた、お前を『リリ』呼ぶ。その時にまた話をしてもやる」

「まつ...」

その瞬間、空間が割れ、僕の意識は奈落へと沈んだ。

第一十一話 鍵なのか？

田を開けると、見慣れたリビングと、モノたちが居た。戻つてきたようだが……。時計を確認する。本を開けたときから、まったく進んでいなかつた。あれほど、色々話したがやはり、おかしな現象がおきていたようだ。

「お兄ちゃん？」

シルが微動だにしない僕の顔を心配そうに覗き込んできた。

「あ、ああ、大丈夫だ。ちょっとな」

「そう？ 大丈夫？」

「大丈夫だよ」

とりあえず、あのことを話すのは、今はやめておこう。それに、こいつらは知つているのかもしれないしな。今は、この本を見るのが先だ。

「さてと、何が書かれているのかな」

いつもどおりに振舞つて、本を見る。

『え？』

全員が驚く、いや、見えていないティー以外が驚いた。そこには何もかかれていなかつた。白紙、全てのページが白紙であつた。いくつページをめくつても、何もかかれてなどいなかつた。

「え、なにこれ？」
「おかしいですね」

シルがペラペラとページをめくる、それを横で見ながらサクミが
言った。

「…………？」

目が見えていないティーが首をかしげる。ティーにキクが説明す
る。

「えつと、本なのにも書かれていないんですよ」
「…………おかしい」

キクの説明で納得して頷くティー。

「ま、まさかこれは！？」
「ライ、なにかわかったのか！？」
「いや、なにもわからへん」

ちょっと怒気が悪くなつた。

「おー」

「い、いや～、ちょっと場を和ませよつかと」

別に和ませんでいい。それを言つ氣力もなくした。とりあえず、
ビーッショウビーッ。

「凍らせてみる？」
「いや、トウカそれはやめよ！」

もつと読めなくなる。

「あぶりだしかもしれねえぜ！ 燃やそづばーー！」

「待て！！ お前じや完全に炭になるーー！ つてああーーー！」

HIMIが出した炎が本を直撃。本が炎に包まれる と思つた瞬間、炎が消えた。

「え？」

炎が本に触れた瞬間、炎が搔き消えた。本はまったくの無傷。こ
げた後も何もない。燃えもしていない。

「これはどうこいつことだ」

燃えない本だなんてありえない。いや、確かに僕の周りではあり
えないことが現在進行形でおきているが、これはない。世界の物理
法則を完全に無視している。ありえてはいけないことが起きた。

「HIMI、オマエ、何かしたアルか？」

メイリン
美鈴がHIMIの仕業ではないのかとHIMIに聞く。確かに、HIMIが何
かしたのならそれで説明が出来るからな。

「あ？ あたしなんもしてねえぜ、トウカじやねえのか？」

HIMIの炎に対抗できるとすれば、この面子の中ではトウカだけだ。
だが、それなら、氷が残るだろ。いや、一瞬で解けたのなら、わからんでもないけど。本は濡れてないし。

「違う」

案の定、トウカは首を横に振った。つまり、この本が燃えなかつたのは、正真正銘、この本の力といふことになる。

『…………』

一同が黙り込んだ。この本をどう扱うべきかまったくわからない。といふか、これくらい説明しておいてほしかったよ銀一。

「はあ～、わからないうことを永遠考え込んで仕方ない。とりあえず、この本はなにやら、重要そつだから、厳重に締まっておこう」
そのほうがいい、無駄にどこかにもって行ったりして、誰かに盗まれでもしたらやばいだろ？。いや、こんな本誰が盗むんだって話だが。念には念を入れておこう。

「ですね。どういうものかは、わかりませんが、とにかくこれは譲らなければいけないと私は思います」
「シルも～！」

キクとシルだけではなく、他のみんなも同じ意見らしい。僕もその意見には賛成だから、いいな。

「じゃあ、閉まつておこう」

本を部屋に持つていく。

「…………これが鍵なのか…………」

その辺の銀一も、他の誰も答えてはくれなかつた。

第一二三話 父母来る

八月の中旬が過ぎて、もう、そろそろ夏が終わるなどといった頃。それは唐突にやって来た。連絡もなく、通知もなく、やって來た。

ピンポーン。

チャイムがなつた。

「あ、お密さんみたいですね、私が出ましょつか？」

キクが言つが断る。もし、友達とかが尋ねてきて、最初にキクが出たら弁解が難しくなる。僕が出たほうがいい。他のやつもしかりだ。まあ、こんな時期に遊びに来る奴はいないだろ？なぜか、一切友達が遊びに誘いにこなかつたからな。本当に友達かと疑いたくなるぜ。薄情な奴らばかりだ。まあ、誘われたところで、シルたちがいるからむやみにどこかにいけないんだけど。

ピンポーン。

おつと考へてる間にもつ一回チャイムが鳴らされた。早く出ないと。

「はーい！」

「よつやくでたか、息子よあいたかつたぞーーー！」

「望月最終奥義旋龍脚！！」

「ぶねーりーーー！」

抱きついてきてきた、隣面のおつさんが吹き飛んだ。まだ、生

きてこらねばつだ。じぶと」。

「あーあー、透。また、強くなつたんじやない？」

その男の隣には、かなり若く見える麦藁帽子をかぶつた女性が居た。

「はあ、何しに来たの母さん」

そう、この人は僕の母さんの望月姫子。もちつきひめ若作りしてないのに、端からみたら十代後半から、二十代前半にしか見えないとつた化物。こつ見えて武術の達人だつたりする。母さんには逆らえない。で、その横で僕の蹴りを喰らつて倒れている変態は、認めたくはないが父さんの望月健。もちつきけんなぜか、息子の僕を溺愛している変態だ。変態以外に説明することがない。会社はそれなりに成功しているが、それだけだ。母さんの方が儲けてるし。

「父さんは無視か！！」

なんだ、変な声が聞こえたぞ。いや、空耳か。疲れてるのか？
ああ、そうかもな、いきなりシルたちとか現れたし。知らないいうちに疲れがたまつてたんだろ？

「ふふふ、一週間休みが取れたから、一緒に旅行に行こつかともつて来たのよ」

「今からー？」

「そつよ～ふふふ楽しみね～」

いやいやいや、今からつて、結構問題じゃん。せめて連絡してよ。準備まったく出来てない。てか、なんで伝えなかつたんだよ。

「何も言わないほうが驚くと思つてな」

「お前か！！」

容赦なく鳩尾を殴る。

「ぐはっー、いい拳だ。わが息子ながらやる……な

はあ～。なんで、こんな奴の息子なんだろうか。いや、溺愛されることについては、まあ、結構いいんだが、何しても許されるし。でも、この父親がついてくるのは、ダメだ。まあ、氣絶したからとりあえず、話を。

「お兄ちゃんビーフしたの～？ 何か大きな音が聞こえたけど」

やう言いながらシルが出てきた。当然、父さんと母さんと鉢合わせするわけで。

「あ
「あ
「あちやー」

話すつもつだつたけど。こんなしきなりではない。

「あらあら、透さん、この子はどうかられなかつてきたのかしら」

怖い！ 母さん顔は笑つてるけど、まつたく目が笑つてない。

「え、えっと、その、ほらこの家かなり家あまつてるだろ。だから、困つてる人たちに貸し出してるんだよ。で、この子はその人の子供

「ふ～ん」

う、母さんってかなり鋭いからな。そんなにじろじろ見ないでくれ。

「やうなの、母さんてつきりど～からか誘拐してきたのかと思つたわ」

実の息子を誘拐犯だと疑うか普通？ まあ、母さんって結構普通じゃないからな。納得してくれて助かつた。あのままだつたら何をされたか。想像もしたくない。

「誘拐なんかするわけないだろ。ちゃんと紹介するから上がつて」

「あら、まだいるの？」

「うん、結構大勢」

「ふうん～」

あれ、母さんの目が怪しく光った気がするんだが、気のせいか？ うん、気のせいだな。さて、父さんが入つてくる前に鍵を閉めてと。

「つおおおおお～～～なぜ、鍵があああああああ～～～」

「や～こで朽ち果てろ」

さて、邪魔者はこれでこない。

「ふ、舐めるな。ピッキングの技術などとつて認得しこるわ～～！」

「警察に捕まれ～～！」

「あびば～～」

がちや。父さんを吹き飛ばし、再度鍵をかける。今度はチエーンもかける。これで完璧だろう。庭側の窓も完全に閉めている。そもそも、あいつらがいるから、入ってこれないだろう。入ってきても撃退してくれそうだし。

「じゃあ、紹介するよ」

ロジングに行き母さんとみんなを紹介した。

第一二三話 父母来る（後書き）

さて、透君の協力両親登場。

ぶつちやけます。変態親父書きやすい…！ 今、この小説の中のキャラで一番書きやすかつたです。

あと鬼畜外道の名前は募集中です。誰でもいいのでお願いします。何でもいいです。面白い名前でもいいです。お願いします。

ついでにこれもさりとしてみる

年齢を順に並べるとこうなる。

美鈴^{メイリン} ^ キク ^ ハリ ^ ライ ^ トウカ ^ ティー ^ サクミ ^ シル

実際の年齢順です。^{メイリン} 美鈴^{メイリン} は若く見えますが中華鍋って歴史長そうなので実は一番年上。ヘタアの中國と同じと思つてください。

第一一十四話 旅行へ

「…………とこつわけで、みんなうちには住む」としなつたんだよ
「…………あらあら、すいにハーレムね。まるでお父さんみたい」

笑いながら言つが、先ほゞと同じくまつたく田は笑つていな。

「ひぐ

田がまつたく笑つていなし母さんが言ひ。母さん、父さんと同列に見ることだけはやめて欲しい。けど、そういうだせない。無理。何か、殺されそうな気がするし。

「ふふふ、冗談よ。怖がる透さんも可愛いからついね
「まつたく嬉しくないよ
「もう、つれないわね」

いや、実の母に、そんな感情を抱いたらどうなるんですか。まずいですな。

「別にいいのよ」
「いや、あんたが良くとも僕が無理だから
「もう、父さんの子供なのにねえ」
「一体父さんに何があつたのー?」

母さんの含み笑いが怖い。みんなもドン引きしてゐる。

「それにしてお……」

母さんがみんなを見渡す。

「この子、この子が可愛いわ！」

ティーを抱き寄せる母さん。ティーはじきなつのことで、なす術もなく、母さんの腕の中に納まっている。

「……………！？！」

うふふ、可愛いわね？」盲田つてところがまた、たまんないわ！」

ああ、母さんが壊れたかもしねない。

「それに、この子たちも可愛いわ」

〔二〕 〔三〕 〔四〕 〔五〕

シルとサクニも捕まりもみくちゅじそれでいい。

「ねえねえ、お着替えしてみない?
服持つてきてるのよ。透さん
に着せるために持つてきたのよ。」

「ちよこと待て、なんて僕に着せるために持ってきた服を詩瑠や
ティーや、朔美に着せるんだよ」

「そりや、女の子用の服だからに決まってるでしょ？」

何言つてゐる「トイツ」という顔で見られた。それはこゝちだよ。こ

つ
ち。

「つまり、女の子の服を僕に着せよ」としてたのか」

一九四九年

「あ、じねんよ、あじまつ。」

何で二つもこいつも、僕に女装させたがるんだよーー。やるほうはたまたもんじゃないよーー。あ？ なんだって？ そんなこと言いつつも楽しんでいるんだろうって？ そんなわけないだろうがーー！ーー こりどら、死にそうになるんだよーー！

「…………それなら、これ、使える」

ティーがかづらなび、この前捨てたはずの女装セットを母さんへ渡した。こいつ、隠し持つてやがったなーー！

「あら、いいもの持つてるじゃなーい。よし、なら、透さんにもしまじょつか

「はー？」

「あたしは贊成だ！」

HIMIが僕の腕を押さええて叫ぶ。「ひー、離せーー！」

「離せ絵美！ 菊、絵美を何とかしてくれーー！」

「すみません」

キクは僕の足を押さえる。お前もかーー！ って、これじゃ、この前と同じじゃねえか！ 何とか振りほどいて……って、動けねえーー！ 何でだ？ 足が凍っていた。

母さんの前で能力使うなよーー！ てか、これじゃ逃げられねえ。ラ

「桃香ーー！」

「見たいから

イは、当然役に立たないだろ？」

「なんや、ものす」う不名誉な」と思われとる気がするんやが
「氣のせいだろ？」

「そか、まあ、つちは新参者やから、見てみたいな」

ほらね、役に立たない。つて、あれ、^{マイリン}美鈴はどう行つた？ 首だけしか、動かせないので、首だけを動かして探す。いた、庭で構えている。

^{マイリン}美鈴は父さんとなぜか、知らないけど戦つていた。人間業じやない動きをしながら。それについていつる父さんつていつた。いや、考えないでおこう。
アレは、ただの変態だ。

「あらあら、^{マイリン}美鈴ちゃんは、拳法家なのね～」

母さんが外の光景を見て言つた。

「あれ、止めなくていいの？」

^{マイリン}美鈴は大丈夫と思うが、万が一といふことがある。父さん、いや、変態はどうでもいいけど、^{マイリン}美鈴が心配だ。

「大丈夫よ。お父さん変態だから」

ああ、母さんの中でも変態は変態認定されていいるのか。いつもどんな生活しているのかもわからだな。そして母さんの言ったことは正しかつた。動きにはついていつているが変態の方が負けていた。まあ、人間とモノじや格が違うのだろう。

「さてと、じゃあ、みんな行くわよ

つて、しました！忘れてた、この状況！まずい、何とか……無理、逃げられない。ああ、なんだよ。この前まで、かなりシリアルスだつたじやん……なのに、終わった途端これつてビリビリうごくだよ……。

心の叫び虚しく、僕は良い様ににされてしました。

結果、物凄い美少女がいた。以上。それ以外に語ることはない。語りたくない、語らせるな。…………わかつた、話が進まないから語る。そこには、女装させられた僕がいた。かつらをかぶらされて、フリフリのついたふわふわした服を着させられている以上。これ以上は僕の精神が保たない。そうだ、今なら、本気で死ねる。この前もやばかったが、これも相当だ。しかも、見てるみんなの視線が痛い。死ねる。絶対に死ねる。唯一の救いは、変態が外で戦っていることだけだ。

「死にたい」

いつの間にか取り付けられた変声機によつて女みたいな、というかマジで女の声が出る。ああ、死にたい。誰か、僕を殺してくれ。だれでもいい。楽に殺してくれるなら変態でもいい。ああ、変態はだめだ。絶対何かされる。

「あらあら、透ちゃん、そんなこと言つちやダメよ。可愛いんだから

「ら

それが嫌だから言つてるんだよ。てか、ちちんって呼ぶなちゃん

つて！

「さてと、準備も出来たし、行きましょうか」

「良くてどこへ？」

「旅行よ

もしかして、母上様、このまま旅行に行くんですか？

第一十五話 旅行道中川の音

僕は本当に女装したまま旅行に連れ出されてしまった。なぜか、モノたちも全員一緒にだ。変態がみんな一緒にいいだろうと言つて車を用意した。僕達望月一家とティーが同じ車で、あとがもう一台だ。なぜ、ティーかといえば母さんが気に入つたからだ。

ちなみにモノたちが乗つた一台はキクが運転している。あの中で唯一年長者で運転できそうだったからだ。一時間前にマーニュアルを読んだだけの運転である。そのわりにはしつかり運転できている。しかし、それでも無免許運転だ。普通なら捕まる。

捕まらないのはここが望月の敷地だつたりするからだ。僕も初めて知つたのだが、変態の事業が大成功して、財産がかなり膨れ上がつたのだ。そのため、望月の敷地が増えたのだ。なぜ、知らなかつたのかといえば、望月の記事を意図的に僕が避けていたからなのだ。

まあ、まさかこんなことになつているとは思わなかつた。

「なんで、道路買つてるんだよ」

「こんなことになると思つっていたからだ」

変態がかつこつけながら言つた。まったくかつこよくなiga。それに絶対嘘だろ。絶対面白くて作つたんだ。それで利用価値がなかつたけど、これでようやく利用できて嬉しいんだ。

「あらあら～。それなら、あれもいつか使うの？」

「あれ？ は！？ まさか、見たのか？」

ん？ なんだ？ 変態が母さんに何か言われて慌ててるぞ。なにがあつたのか？ 会話の内容だけじゃよくわからないな。ティーに

聞いて見るか。ここにつ心読めるじ。

「なあ、何のこととかわかるか？」

「…………」

ティーが目を瞑つて何かを聞くより耳をそばだてている。これで心の声を聞いてるんだろうな。

「…………聞かないほうが身のため」

いつたい何をやつたんだあの変態は…… やめた考えるのやめよう。そうだ、やめよう。ティーが言つてるんだ。それは本当に絶対に聞かないほうがいいんだら。聞いてたまるか。とりあえず、変態にはあとで肅清を加えておこう。

しばらくは何事もなく、旅行は進んでいった。なんたって車はこの一台しかないのだ。何か起きたほうが異常だ。だが、それは間違いだつたよつで……。

「すまん、ガソリン切れだ」

変態の謝罪に蹴りで答える。山の真っ只中でなんとガソリンがなくなつたそなんです。この変態肩野郎にどうせやつて落とし前つけさせようか。

「Jの体勢ならパンツが あんべらー？」

そうだった、今僕女裝だつたんだな。うん、慣れたもんですつかり忘れてたよ。忘れたくなつたけど。見られても構わんがこいつにだけは嫌だ。殺したくなる。

「で、どうするんだ？」

「大丈夫よ、待つてれば助けが来るから」

母さんがいうのなら本当に来るんだろう。助かったよ。しかし、綺麗なところだ。車の中だつたからよく景色を見てなかつたが、緑が綺麗な場所だ。水の流れる音が聞こえるから、どこかに川でもあるのかもしねり。

「…………水の音」

ティーも感じたらしい。まあ、耳がいいから僕よりも聞こえてるから当然だな。しかも、何か行きたいみたいだし。

「母さん、近くに川があるみたいだから言つてきていいかな?」「いいわよ。私は変態と待ってるから。みんなで言つてきなさい。終わつたら電話するわ」

「わかつた。みんな、行くぞ」

みんなで近くにあると思われる川へと向かつた。

第一一十五話 旅行道中川の音（後書き）

はい、どうもテイクです。

来週から一週間ほど、用事で出掛けるので執筆が一切出来ないため、
二週間ほど更新できなくなります。

ので来週と再来週の更新はお休みしたいと思います。

間章5（前書き）

再び鬼畜外道登場。

前よりは鬼畜でないはずです。たぶん……。

「ヒヤハハハハハ！」

少年が龜が退きつめられた床に女の顔を押さえつけ、原付に乗りそのまま引き摺っている。女は走っていくたびに体が削れて行く。肉が削げ落ち、骨をあらわにして、神経繊維を裂き、脳に過剰な痛みを伝達する。

女は痛みで気絶しても、すぐにまた痛みで意識を引き戻される。それも、すぐに痛みで意識を切斷される。何度も何度も続く、永遠ともいえる連鎖。しかし、それもすぐに終わる。

女の体感時間で永遠とも思えた時間はたった一分にも満たない時間で、女は絶命した。

「あ～？ なんだもう死んだのかよお。もつとたのしませろっての
つたくよお」

「坊ちやま。もう、戦力は十分なのですか？ なんならまだ手配で
きますが」

「ああ？ 十分だよバーカアー！ あんま俺様に指図すつじぶつ
殺すぞお！」

「…………わかりました」

執事はさつさと部屋を出て行く。

「ねえ～、マスター～」

艶っぽい声で金髪赤眼の少女が少年に囁つ。

「わたくし。ねえ」

金髪の少女が少年に顔を近づけながら囁つ。

「相手の所に遊びにいっても構わない？」

「そりだなあ。まあ、いいんじゃねえ？ てめえが消えて良いならなあ」

「もう、いじわるねえ」

「ん~、でもそりだなあ、遊びに行く位ならいいだろソザイ」

少年がそう言って執事を呼び、旅行をすることを伝える。執事は少年が何をするつもりなのか察した。

「ですが、それは……」

「ああん？ 僕様が言つてる事が聞けねえのかああん？」

「し、しかし」

「てめえに指図される氣なんかねえ。やれ」

少年が金髪の少女に命令を下さす。

「了解よマスター

「がはつー」

金髪の少女が執事の首を掴み持ち上げる。少女の細腕では到底持ち上げることが出来ないはずの老執事の体は宙に完全に浮いていた。まるで、人形のように金髪の少女の手の中で、執事は弄ばれていた。

「ねえ、どうやって殺して欲しいの？ ねえ、ねえ、ねえ？ ほら、早く答へなさいよお~、じゃないと、私が無惨で、惨くて、残忍な殺し方をしてあげるわえよ~」

「ぐああ、くう、かづ！？」

執事の首がへし折れるギリギリの力で金髪の少女は締め上げる。笑いながら、残忍にして、死なないよう息が続くように、ギリギリで力を緩めたり、すぐに締めたり。遊び、彼女にとつてはそれも遊び。楽しい楽しい遊びだ。

しかし、それもすぐにツマンナクなる。抵抗も出来ないのだ。この執事は護衛も兼ねているので平凡普通な人間とは違いそれなりに鍛えてあるはずであった。それなのに、金髪の少女の力に抵抗すら出来ないので。ツマラナイのも当たり前だろう。自分よりも遙かに長生きした執事が、まるで子供にしか感じられないのだから。

「もひいいやあ～、ねえ、生きたまま首を反対にしてみよつか～？」

返答を聞くまえに金髪の少女は、首を掴んだまま、執事の頭をあいている左手で掴み、無造作にひねる。

「きゅ」という音が響き、執事の顔は180。逆を向いていた。それでも幸か不幸か執事は生きていた。自分で自分の背中を見下ろすというレアな経験を体験してた。常人ならばショック死をしているだろう光景だ。それでも執事は生きていた。

「アハハ、ねえ、どんな感じい？　ねえ、自分の背中を見るつてどんな感じい？」

執事は答えられない。下手に体を動かしたら最後、ベッドから動けぬ体になるのは必須だ。まあ、どの道、ここから生きて帰れたらなの話であるが。

「ほおらあ、もひとまわしてみよつか～、ねえ！」

「さあ、今度こそ、何かが捻じ切れた。執事はそれ以降動かなく

なつた。力が抜け、だらりと手足が垂れ下がる。

「あら? もう死んだの? ツマンナイなあ~、ほら、あんたあと
は好きにしていいですよよ」

ぱいっと、ゴミを投げるが如く、執事を佇んでいた紫髪の少女に
ほおる。

「グチャグチャニシティイノ?」

「ええ

「ソウ」

紫髪の少女はまず、執事の指を一本一本捻じ切っていく。既に事
切れている執事は悲鳴を上げることはない。ただ、捻じ切れた指か
らは今だ血が流れ出る。体が、その血で赤く汚れていくが、紫髪の
少女は気にならない。むしろそれを楽しんですらいるように見える。
無表情で顔にまつたく変化はないのだが。

手の指を全て捻じ切った後は、足の指。それも捻じ切り終わると、
腕を引き千切る。それを細かく砕いていく。そして、全て潰したあ
とは、腹に指を突き刺し、無理矢理腹を、腹膜を引き裂いく。内臓
がその姿をあらわす。大腸を掴み外に引っ張り出す。それを掴み、
執事を振り回す。部屋に血の雨が降る。少女たちも、少年も気にせ
ず、血の雨を浴びていた。

遠心力に耐え切れず大腸が引き千切れ、執事の体が宙を舞う。そ
のまま窓から外へ落ちてしまった。紫髪の少女はおもちゃがなくな
ったような子供の顔をしていた。だが、すぐに近くにあつた、出来
損ないの少女の残骸に歩み寄り、それで遊び始めた。

何がしたいのか。いつたいこんなことをして何になるのか。意味
がわからない。本当に意味がわからない。

「さあて、邪魔者は消えたな。さあ、遊びに行くぜ。まあ、その時に對戦相手と偶然かち合つて騒ぎになつても、まあ、仕方ねえよなあ」

少年と五人の少女は、部屋を出て行った。

間章5（後書き）

鬼畜外道君の名前募集中。 素敵な名前を考えてやってください。

第一十六話 寄り道、川遊び（前書き）

お待たせしました！

PC復旧後、執筆意欲増加により、予定変更で更新です！

第一十六話 寄り道、川遊び

音のする方へ進むと、雄大な滝を持った川があつた。夏の暑さは厳しいがここだけ、温度が低く感じる。水は澄んでいて川底がよく見える。魚もいるようだ。ここでキャンプも出来るんじゃなからうか。川辺は砂利が敷き詰められているから、ちょっと離れたほうがいいと思つけど。

「ここにいるんだな」

「…………綺麗」

「おお、綺麗じゃねえか。そこいらへんの木とか燃やしてキャンプアイヤーやりづば」

HIMIが炎を出す。

「…………やめい」

「せうですよ。せっかくの自然が台無しです」

キクがHIMIをたしなめる。しぶしぶHIMIが炎をしまつ。まったく、HIMIで山火事なんて起こされてたまるか。

「お兄ちゃんー！」

シルに呼ばれたのでそちらを見ると、シルが川に飛び込んでいた。

「つめたーいー！」

何か言おつかと思ったが、楽しそうだからやめた。邪魔するの野暮だわつ。そういう自分も入りたいのだが、さて、この格好だと

こに人の目があるかわからない以上、うかつなことはしないほうがいいだろ？ 裸足になつて足くらいはつけよう。

そう思い、裸足になり川に足をつける。ひんやりとした水が心地よい。

「ナイス！」

変態が水の中に居た。どこで用意したのか酸素ボンベまで用意して。

「死ね」

秘技を使い酸素ボンベを全て抜いた。変態は沈んでいった。ふう、これで静かになった。まあ、楽しもう。

「つて、冷たつ！？」

何！？ 何でこんな冷たいの！？ 足を抜いて周りを見る。その理由がわかりました。

「桃香何をやつてるんだ つ！？」

トウカが水につかっていた。それだけ。外見的にはそれだけだが、僕には見えている。トウカの周囲が凍っていることを。能力使つて水を冷たくしている。そして、裸でした。思いつきり顔を背けたから首が痛い。

「暑い」

いや、暑いからつて能力使つて冷やすなよ。入つてるだけで十分

だよ。十分冷たいよ。それに裸でやるなよ。いや、水着とか買ってやつてないけど、それでも裸はないって。僕男ですよ？

「透なら、別に構わない」

いや、トウカが構わなくても僕が構うのですよ。

「シルも…！」

「ひらこひら、行けませんよ。人前そつ、裸になつては」

服を脱ぎそつになつたシルをキクが止める。

おお、キクよくやつた。本当にキクは常識がわかつてゐる。他の奴も見習つて欲しいと周りを見回した。うん、それが良くなかった。

「ぶはあ…！　ええええ、HII…！…！　おおおお、お前は何をやつてんだ…！！！」

「何つて水浴び」

うん、わかつてゐよ。それはわかつてゐよ。僕が聞きたいのは何で裸なんだよつてことだよ。なんだよ

今回は裸祭りなのか。作者は何を考えてるんだよ。何も考えてない？　ふざけるなよ。何か考えておけよ。ただ、裸出したらアクセス数稼げるとか思つてるんじゃなかろうな。なに？　思つてない？　じやあ、何でだよ。…………ふざけるなよ…！…！　なんで僕を困らせるつもりだけで、こんなことすんなよ。

「あの透さん？　どうかしたんですか？」

「は…？　い、いやなんでもない」

いかんいかん、なんかよくわからん電波（仮）を受信していた。

まづい変人になるところだつたぞ。気をしつかり持たなければ。このまま作者の術中にはまつてなるものか。

その後、何とかガソリンを補充し再び、目的地に向かつて、車を走らせた。

一時間ほど走り続け、我ら一行は目的地へとたどり着いた。どういうわけか、嫌な予感しかしない古い旅館だ。ここもうちが所有しているらしい。物凄く安く買ったと母さんに聞いた。その時点でもう、嫌な予感しかしない。しかも、まだ女装中。マジで何か起こりそうで怖い。いや、別に幽霊が怖いとかじゃないんだが、もとより、家には妖怪みたいなのがいっぱい居るし。

たが、今回同行しているのは変態だ。そ、この変態が怪しこだ。ここに来てからそわそわしてゐるし。どうか何で変態が一人部屋で、僕はその他みんなと同じ部屋なんだよ。おかしいだら明らかに。いや、変態とも同じ部屋は嫌だが。それでも、もう何部屋か用意しろよ。聞いたらなんだか知らないが、団体客が占拠しているらしい。恨むぞこんちきしそう。

「透さんなんだか不機嫌そうですね」

母さんが言つ

この人はわかつてて言つてるだろ。僕の不機嫌な理由も完全にわかつてるだろ。それなのに聞いてくる。はあ、まつたくこの人は。

「ああ、風呂行くぞーー！」

変態が乱入してきた。

「流星裂破無明腳！！」

あひは～！？

なんだかよくわからない技が発動し変態が吹き飛んだ。そのまま、

扉を突き破り廊下まで吹き飛んだ。なんなんだろ？が、この技は。つて、しまった、他にも寄るんだつた！！

慌てて廊下に出ると、同年代の少年一人となんか、アニメみたいな髪色をした少女五人の六人の団体に変態が突っ込んでいた。

何か、親近感が湧くのだがなぜだろ？が。ただ、とても嫌な感じがする。こいつらには関わらないほうがいい。なぜか、そう思った。

「すみません、うちのバカが」

「いや、いいよ」

「ねえ、早く行きましょうよ～」

「わかつてゐるわ、じゅあ、また」

やう言つてその少年たちは立ち去つていった。

「あれ、またつて、何だ？」

まあ、良いか。とりあえず、このままこの変態をここにおいておくのが危険だ。縄でぐるぐるに縛つて更に毛布でぐるぐるに縛つて、更に更に、縛つてと。よし、これくらいしていれば出てこれないだろ？。これで少しほ静かになるはずだ。それと、そろそろ女装をやめよう。服はもうとつぶくに乾いているんだから。

* * * * side?????

クフフフ、あれが相手か。まったく女装とは笑いを堪えるのに苦労させてくれる。クク、クハハハハハハ。

「マックタクガマンデキテナイ」

お？と、これじゃ変態だな。気をつけねえと。さて、これから、

あいつら風呂みたいだな。ククク、これは好都合だ。さあ、て、せいぜい遊ばせてもらうぜ。

「さて、行くぞお前ら。ククク、風呂だ風呂」

風呂へと俺たちは向かつた。

* * * * S i d e o u t

というわけでようやく普通の服装に戻れた僕と母さんと変態を除いたいつものモノメンバーは現在進行形で風呂に向かっていた。母さんが変態を見張つてくれているのでノビノビと入れるだろつ。母さんにはあとで感謝しないとな。

「しかし、温泉なんて久しぶりだな」

中学は行つてから行つてないから、三年ぶりかな。うん、まあ変態に連れてこられた時はいやだつたが、楽しくなつて來たな。

「ねえ、お兄ちゃん、温泉つて何?」

シルが聞いてくる。

「あたしも知りたいぜ。なあ」「私は知っていますから、私に言わないでくださいよ。HIIさん」

エミは知らない、キクは知っている。

「……………ワタシ知つてゐる」

「でせべじ回せちひ」

ティーとライも知ってるんだな。

「知らない」

「知らんアル」

トウカと美鈴マイリンも知らないんだな。よし、じゃあ、説明しておくれか。

五分くらいの温泉の説明を終える。いや、手抜きじゃない。温泉の説明している描写が面倒だったとかそんなんじゃないはずだ。そんなわけで温泉。

第一一十七話 接近中（後書き）

新年一発目の更新です。

皆様あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願ひします。

さて、挨拶も終わったので連絡を。

次回の更新は十六日を予定しています。
ので、皆さんお楽しみに。
それではまた。

第一十八話 温泉

「ふう、良い湯だった」

僕はマッサージ椅子に座りながらくつろいでいた。何でもう、あがってるんだって？ きちんと描[写]しろって？ いや、男の風呂を見て何が楽しいんだよ。何、違う？ あいつらの風呂の描写を書けって？

まあ待て、あせるなよ。焦つたら良いことないって作者が言つてる。この後きちんとやるはずだから、とか期待するなよ。何もないから。というか、普通に風呂はいるだけなんだから、何もないぞ。あるほうがおかしい。まあ、変な音が響いていた気がするが、それだけだ。何もそんなお前たちが期待するようなことはなかつたと思うぞ。それでも見たいのか？

わかった、お前たちの意思是固いらしい。どうなつても知らないからな。ふう、って、何で僕がこんなものを読まなきゃいけないんだよ。

「主人公だから」

お前誰？

「神」

は？

「それでは、始まり始まり～」

ちょっと待ておい。とこ、じゅじゅのうて普通前書きとかだ

るー。

* * * * Side二人称。

キクたちが大浴場に入ってきた。大理石で作られた無駄に高級感あふれる風呂である。近くの源泉から温泉を引いているので、中々な湯であろう」とが予想できる。

「うわー、すゞいねー。家のお風呂よつよつよー

はしゃぐシルが言つ。そのまま走つて浴槽に飛び込みそうな勢いであった。それをキクがとめる。

「駄目ですよ。まずは、体を洗わないと、最低限のマナーです」「えへへ、そつかー」

そのまま浴槽に入ろうとしたトウカがそれを聞いて誰にも気づかれないように動きを止めて、自然な動作で体を洗いに行つた。若干いつもの無表情が赤くなっている。

そこら辺を詳しく描写すると面倒になるのでカット。見たいと言われても無理ですので、悪しからず。というわけで全員、湯船に浸かる。

『ふつ~』

ゆる~い声のハミング。

「ふえ~、気持ちいねえ、まったく。少しうるい気がするけどよ」「HIIおねえちゃん、間違つても炎は出さないでよね」「もうですよ。ただでさえ、わたしたちにとっては熱いんですから

シルとサクミがエリを囁める。

「わかつてゐるよ」

「じゃあ、冷やす？」

「いや、トウカさん。それも駄目ですよ」

「キクの言つとおりアル。他の人も来るアルから。せひんとしてないと駄目アル」

氷を出しそうな勢いのトウカをキクと美鈴^{メイリン}が止める。

「よつしや、サウナ行くでティー」

「…………いや」

「そうか、そうか。行きたいか

「…………ちが

「わかつてゐるで、めつちや熱いとこせんな……」

「…………」

ライにティーが強引にサウナへと連れて行かれた。ライはまったく話を聞かないで、強引に連れ出したので、サウナに入った途端、ティーに殴られていた。そんな様子をキクたちは微笑ましげに見ていた。殴ったティーだが、どうやら、サウナを気に入つたようで、満喫していた。

「ふう、しかし、たまにはこうすることも楽しいですね」

キクが呟く。

「そうだなあ。で、透は今頃何してんだろうな?」

「隣でお風呂入っているはずですよ」

「見に行くか」

「無理でしょ HII」

そんな話をしていると、新たな女性客の一団がやって来た。それは、先程、透が変態を蹴り飛ばした時に遭遇したアニメ色の髪をした集団だった。それは、キクたちにも言えるのでキクたちは気にしなかった。ただ、おかしな気配を感じていた。何か、自分たちを同じような。

キクたちはそれが何だか図りかねていた。

「あら、そこの小娘は気がついたようですねえ」

そのとき、金髪の少女が言った。ティーが金髪の少女を睨みつけている。敵意を込めて。

「おこおこ、ティービーしたんだ?」

「…………敵」

「何?」

HIIが動く前に、紫髪の少女が動いていた。サクミとともに飛び出し、紫髪の少女を抑える。

「うぐ、な! わたしよりも力が強い! ?」

「セントタクバサミ! トキガワタシニカテルワケガナイ」

紫髪の少女と、サクミが膠着状態になる。

「おこ、てめえらー!」

HIIがそれに加勢しようと動くところを止めた。前に猫のよつ

な雰囲氣のある赤髪の少女が現れた。

「……？」

「ニヤハハハ、あなたの相手はつち」

その状況を見たキク、シル、トウカが動く。

「助けを呼ぶべき」

「そうだね」

キクと、シルそれとトウカが風呂から上がり、助けを呼ぶために外に出ようとすると田の前にコバルトブルーの髪の少女が立ちふさがる。

「…………行かせない」

それをサウナから出て物陰から見ているティーアライ。

「あちやー、これはまずいで、どないする」

「…………キヤラ被り、それより、後ろ」

「へ？」

閃光が煌めいた。

慌てて避けるアライ。

「どあああーー！」

「危ないなーー！」

「うるさいわねーー！ 驚ぐな！ 私はどうでもいいのに連れ出され

て切れてんのよ！！」

茶髪ショートヘアの少女が一人の後ろに立っていた。

「あらあら、楽しいことになつてきたわねえ。ねえ、天井に入る居ている奴もそう思わない？」

金髪の少女が天井に張り付いていた美鈴^{メリリン}に言つた。美鈴^{メリリン}が飛び降りてくる。

「…………『氣がつかれたアルか』
「そんなに殺氣がでてねえ」
「そうでアルか」
「さあ、遊びましょ！」

風呂場で突然の乱入者との遊びが始まった。

第二十八話 温泉（後書き）

今回なんかやりすぎた感があるようなないような。
な、ないよね？ 大丈夫だよね？

第一十九話 サクミ戦つ

紫髪の少女がわたしを掴んだまま持ち上げる。そして、そのまま浴槽に投げ込んだ。落ちた衝撃の水柱が天井にまで届いた。紫髪の少女は力を抜いてゆっくりと浴槽に近づいていく。

さばあとわたしは湯から出る。目の前には紫髪の女。力では勝てそうにない。唯一の自慢だったが元が違うようです。それでも、諦めるという選択肢はわたしにはないです。透に無事な姿で会わなければこの旅行が台無しになるのだから。

「よくもやつてくれたですね」

「ミズニナゲタカラブジ？」

「実力ですよ」

「ソウ、ナラマダ、アソベル」

それだけは勘弁してほしいですよ。だって、勝ち田なさそんなんですよ。でもまあ、頭はわたしの方がよさそなので、何とかなるかもしれません。まあ、何とかするんですけどね。

「わたしは勘弁してほしいですねっ！！」

お返しとばかりにその無駄にウーブのかかった目がちかちかする紫色の髪を掴んで湯船に叩き込む。おお、軽い。まあ、わたしも人のこと言えないほど軽いんですけどねっと！！

ザバーンと大きな音を立てて紫の少女ええい、面倒なので紫です。紫が湯船に沈ん見ました。その間にわたしは上がります。結構あの湯船つて深いんですよ。本当にどうしてこれくらい深いのかつてくらい深いんです。

おそらく紫も足は着かないはずです。わたしも足つきませんでし

たからね。だから、泳げない奴は沈みます。あの紫は泳げないような気がしたので。沈めてみました。これでうまくいけば終わりですけど。

「まあ、そつは行きませんよね」

妖怪の「ことくあがつてきました。いつたいどりやつてあがつてきたのやら。後で見たのですが、どうやら、あれです、壁に指を刺して上がつてきたそうです。怪力ワロタです。わたしもやれば出来るのでしょうか？ 洗濯バサミの仕事越えてますよねこれ。

「ヨクモヤツタナ」

「お返しですよ」

「ソウカ、ジャア、ワタシモ」

ふつ、そういうはないのですよ低脳。飛びかかつてくる紫。ただ、一直線に向かつてくるだけではわたしを倒すことは出来ないということを教えてやるです。

「目潰し！！」

「ギャアアアアア」

何をやつたかというかは、単純ことです。シャンプーを相手の目の中に入れただけです。うん、危険ですね。ちょっと、やりすぎた感がありますがわたしも死にたくないので本気でやりたいと思いますよ。そのまま、目を押さえている紫の足を浮かんで、ぶん投げた。落としたのは水風呂。なんとなくあの紫は暑さに強がつだつたので。

「ヒヤアアアアアアア」

「計画通り」

うん、効いてますね。しかもあの水風呂も『冗談みたいに深い』ですから、また、あがつて来るのに時間がかかるはずです。

「…………」

あれ、おかしいですね、あがつてきません。

「………… も、もしかして、やつてしましました?」

や、やばいですよ。こんなところで、ござえもんなんて洒落にな
りませんって! あ、よかつた浮かんできたって、はい、意識ない
です! -!

「や、やばーーー!」

さつきまで、なぜか戦っていた紫を慌てて引き上げる。見てみると、気絶してるだけみたいのです。ふう、よかつた。下手をすれば心臓麻痺ですよ。まあ、いいですか。勝つたのでよしとしましょう。さてと、ほかの人は大丈夫でしょうか。

第三十話 H///戦ひ？

s i d e H / /

「ニヤハハハハ、まあ、行くよー。」

どうにかサクミの援護に行きたいんだが、どうやらあたしの相手はここにつらしじ。さつき風呂に投げ込まれていたが、まあ、あいつなら大丈夫だろ？ あそこ深いけど、あいつ泳げるし。問題はあるしだな。こいつ、気味悪いんだよな。なんか嫌な予感がするな。油断は禁物だ。

「来いーー！」

両手に炎を出して身構える。相手が何をしてきても何とかできるようになる。こいつの力はわからんが、まあ、透まで被害が行かないようになるだけだな。恩をあだで返すとかあたしの柄じゃないぜ。赤髪の少女が向かってくる。もう、面倒だから、こいつのことは赤猫と呼ばう。なんか猫っぽいし。そして、やっぱり思つたとおり赤猫は猫っぽかった。動きが妙にしなやかで関節なんてないぜ的な動きをしてくる。正直気持ち悪い。こいついい何なのやら。

とか思つてると、カポエイラの技ケイシヤーダを放ってきた。わからない奴はググレと言いたいが、説明してやる。顎への蹴りだ。それを紙一重でかわす。危ないぜ、喰らつたら、脳震盪でも起こしかねん。

しかし、どこでカポエイラなんて覚えたんだこいつ。そして、あたしは何でカポエイラの技を知つているんだろうな。神の意思か？ しつかし、タオル一枚で戦いつてなんだかな。

無駄なことを考えていると、またもやケイシユーダを放つてきた。

それもかわす。フツ、見ていればかわせない攻撃ではない。
かつこつけてみたりして。
なんて、

「ヤー、当然だらんな～！」

「いっちゃんも行くぜーーー！」

炎を伸ばして、剣のようにする。うん、透が持つてた漫画、なんか友達が押し付けたとか言つてたやつ読んで一度やつてみたかつたんだよ。なんだっけ、とあるなんとかって、まあ、うん、うまく出来た。さあ、行くぜ！！

炎剣をぶん回す。剣術なんて知らんから適当だ。まあ、元「ンロのあたしが剣術なんて知つてたらおかしいだろう。だから、振り回すだけだ。

「ニヤハハ、当たんないよ」

む、やつぱあたらねえな。かと言つてもうちよい、火力とかを擧げると、こじが燃えちまうんだよな。ほかの奴らも巻き込んでしまうし、スプリンクラーに反応されたら困る。面倒は苦手なんだ。これも面倒だから、早く終わらせたい。楽しんでる風だつたけど、実は結構面倒だつたりする。どうする？ あ～考えるのも面倒になつて来た。さつと、あいつ帰つてくれないかな。

「むむ、なんかやる気ない？」

「ああ？ ああ、ない。面倒になつて來た。 といふか、炎出すの面
倒なんだよな。 なあ、帰らないか？」

だつてさ～、あたしは元はコンロだぜ。いや、こいつバトル展

開は好きなんだが、いざ自分がやるとなるとなんか面倒になつて來た。やっぱ、こういうのは見るのが熱いよな。うん、実感した。

まあ、ほかの奴も大丈夫そうだし、こいつが帰つてくれれば何の問題もないんだし。

「それもやうに」や、うちも面倒嫌いやし。帰ろつか

「おう、じゃな

「じゃ」

赤猫は本当に帰つて行つた。おお、マジで帰つたよ。もしかして、あたし、そういう交渉の才能でもあるんじゃないか？　まあ、良いやさてと、もう一風呂入つてくるかねえ。

「つて、あれ？」それで、あたしの出番終わり？　こんなんによかつたのかなおい

第三十話 H///戦ひへ。（後書き）

やうじていつなつた……

闇章六（前書き）

1ヶ月お待たせしました。
これから復帰です。
これからもよろしくお願ひします。

静か過ぎる。森が静かだ。完全に音がない。森の中で、これはありえない。風が吹けば必然、木々が揺れる音がする。動物が動けばそれなりの音がする。完全な無音などはありえない。なのに、無音の森の中に少年が立っている。ありえない景色。ありえない。ありえない。

「さあて、今頃あいつらは楽しんでんだろうなあ、ああ、俺も行きたいぜ。まあ、それは変態だから駄目だな。さあてと、おいじじい、出てきたらどうだあ？」

「ばれておったか」

森の木の裏から、源さんが出て来た。少年の前に出てきて、少年を睨みつける。

「何を考えておる。お主がやつておるのはルール違反じゃぞ？」

「ハッ！ 何だそんなことかよお。俺たちやあ、遊んでるだけだぞ。何か問題でもあんのかあ？」

「ニヤニヤとしながら言つ少年。わかつてんだよ。そんなことは。俺は面白ければそんだけでいいんだよお。どうせ、代わりになる奴ならいるんだからなあ。そう、少年の表情は語つていた。

今までに、旅館の風呂場では少年が遊びと称する戦いが起きている。源さんの力で、誰にもバレないようにしている。普通ならば、処罰せねばならぬ事項ではあるが、少年が言つとおり、これは遊びでしかない。本来の戦いは両者の合意でのみ始まり、その中でのみ、ルールが適応されるのだから。

一方が一方的に行う攻撃は普通は反則である。だが、一方が攻撃

を認知しておらず、さらに、それが、相手の主人にバレなければ、反則にはならない。戦っている彼女たちは、透にはバラすることはない。つまり、これは本当に遊びでしかない。一步間違えれば己が滅ぶ危険な遊びだ。

「なんとも、危険なことをする」

「ハツ！ 危険？ この程度で？ フツ、フハハハハハハハハ…！ この程度危険ですらない。じじい、てめえが言う危険と俺様が言う危険はレベルが違うんだよ、ばあかあ…！ ハハハハハ

「ならば警告しておこう。その慢心がいざれ己を滅ぼすことになるぞ」

「ハツ！ わせてみな。じゃな、じじい、ハハハハハハハハ…！」

少年は立ち去つていった。その途端、闇を切つたかのように森の中に音が戻つて来た。少年の異質な気配に森の全てが逃げ出していく。源さんが思うのは圧倒的危険。あの少年はいすれ、全てを破壊してしまうだろ？ そんな予感。

「すまんの、わしには止められんかつたわ」

源さんは亥き森の中に消えた。後には、何も残らなかつた。

少年の田の前には熊がいた。野生の熊。食えているのは少年に向かつてうなつていて。

それだといふのに、少年はまったく隙だらけ。襲つてくださいとも言う風に、熊など眼中にないとい風に立つていて。

「ハツ、おもしれえ、あのじじい、いつか俺が殺してやるよ
『ガアア…！』

熊が少年に飛びかかる。その爪にかかれれば、少年など一瞬のうちに切り刻んで胃袋の中に入れてしまうことが出来たはずだった。そう、はずだったのだ。実際はそんなことにはならなかつた。そんな空氣にさえさせてはもらえなかつた。

「あ、！」

一睨み、たつたそれだけ、それだけで、熊は逃げ出した。この森の中で最強を誇っていた熊であったが、少年が睨むだけで、おびえ、逃げ出した。

「フン、さて、戻るか。フツ、ハハハハハハ！」

少年は、旅館へと歩を向けた。

第三十一話 キク、シル、戦っちゃいました

s i d e キク

「バルトブルーの髪の女の子が田の前に立ちふさがっています。さて、どうしたものでしょうか。助けを呼ばないと色々と大変なことになりますし。透さんにも迷惑をかけてしまいます。シルも巻き込むわけにはこきませんし、さて、どうしましょう？　あ、トウカさんは早々とどこかへ行つてしましました。どこへ行つたのかわからりませんが、おやりくは大丈夫のはず。

ほかの方々も勝手にやるでしょうから、私たちは田の前のこの女の子を何とかしましょひ。話が通じるなら、それでいいんですけど。通じませんよね。あちこちで戦つてるみたいですから、黙田でしうね。

さてと、私達も見詰め合ひてゐる場合ではないですね。

「ねえ、キクおねえちゃん、どうするの？」
「どうするも何も、とりあえず、私が相手をひきつけるので、その間に助けを、呼んできてもうりますか」
「うん、わかった」

さてと、まずははじましょひつか。とりあえず、この女の手と話をしてみないとわかりません。

「あなたどうしても、私たちを通す気はありませんか？」
「…………言われた、誰も、出すな……て」「そうですか？」

見たところ何もしなければ戦闘の意思はないようですね。でも、

おそらく、出ようとしたら戦うことになりそうですね。家事は得意ですが、戦いはあまり得意ではありません。シルはもつと得意じゃないはず、シルだけでも逃がさないと。助け云々の前に私たちは、無事に帰らないといけないので。ほかの人たちは、大丈夫みたいですね。いつも暴れてるだけはあります。

「わかりました。シル。私が良いと言つたら走つて外に出てください。着替えてから、良いですね、きちんと着替えてから、外に出てください」

大事なことだから、一回言います。でないと、この子裸のまま外出をやうでしたから。

「うん、わかった」

これでいいわね。さてと、やりましょう。

「.....」

「行きますよ」

女の子に私は走ります。あ、良い子はまねしないでください。とても、危険ですから。風呂場で走るのは転倒の危険がありますから。頭部を強打し、脳震盪、脑出血、意識不明、最悪死に至ります。アイコンタクトでシルに合図を送り、シルも駆け出す。一人同時に動いたのを見て、女の子がどちらを止めるべきか悩みだす。その隙に私は女の子を羽交い絞めにする。

その間にシルはしつかりと脱出。これで何とかなるでしょう。

「.....逃げられた.....私怒られる?」

「大丈夫じゃないですか？ 私なら怒りませんよ」

「…………そ、う、じ、や、あ、あ、な、た、ツ、ブ、ス」

どうして、そんな思考になるのでしょうか。言葉も途切れ途切れで、聞き取りにくいですしども、とりあえずは少しだけ相手をしましょう。時間稼ぎとも言いますが、シルが戻ってくるまでの間、彼女をここに足止めをします。他の方も忙しそうですから、応援は望めません。だから、少しだけ本気を出しましょう。

箒を取り出す。

「行きまゆ」

突っ込んでくる女の子。その足に向けて箒を振るつ。あまり傷つけたくありませんからね。幸いここはお風呂です。他の場所よりも滑りやすいことこの上ない。ならば、足を払えれば簡単にこける。

「……む」

予想通り、女の子が滑つてこける。追撃はしません。私の役目はあくまでシルが誰かを呼んでくるまでの時間稼ぎ、一般人の前でこの人たちも何もできなのはずでしょつから。

「さあ、あと何回床に這い蹲りたいですか？」

第二十一話 ライとトレー放り

さつきから、茶髪がなんだがようわからんもんを打つてきおる。

「あー…… もうー…… さつきと当たらなさいよ……」

「当たら死ぬわボケエー……」

さつきから、茶髪がなんだがようわからんもんを打つてきおる。なんなんやあれば。当たらだじゅすまんでありますや。しかも、その身一つでやるつてもうあぶなすぎや。うちは平和を愛する市民やで。まったく、こんな荒事は、ばっち来いやで！ おもうなつてきたわ。まあ、相手の弾幕なんぞ、うちが抱えたティーがあるかぎりあたらへん。このちみつ子本当に役立つわ。しかし、あれやなこの風呂マジで広いわ。露天風呂もあるんやから。まあ、そのおかげでにげれどるんやけど。

「……無駄な」と思つてゐ暇があるなら、早く何とかする。右に回避

「あこよーー」

「ああ、もうー…… 何で当たらなーのよーー！」

このちみつ子のおかげやで。あはは、見らあこつがバカのようだ！ 「めん、ム カなんてうちには無理やつたんや。しかし、あれは何をうつとるんやろな。かなり威力あるからうつとなもんやと主運やけど。

「なあ、なんやわからへんか？」

「…………あこつの声うるわしくてわからない」

「うん？　ああ、あこつ騒ござぬからな。」こいつは特に耳にいか
ら、余計堪えることやうな。まあ、それはしゃあない。そろそろこいつ
ちも反撃しようか思つたのいやけどひじよか？

「…………ネ」「なぜ？　好きにすれぱいい。左に回避」

「ほこよー」

「キー、だからなんで当たんないのよー。当たつなさこよー。」

当たつてやるわけじまこかんのや。やもそも、当たつとつないか
らなあ。うん、当たつたら死ぬわ。ティーだつたら粉々になるんや
ないか？　うん、平和主義のうちからしたら大歓迎やけど。

「…………死にたい？」

「それは勘弁や」

「…………それより攻撃したら」

「おお、やうやつたな。行くで」

「…………跳んで」

「おわあ！　攻撃しようとしたらこれかいな！」

「アレを避けるなんて、あんた何かしてんの。まあいいわ、もつと
と当たつて楽になりなさいよーーー！」

だからそれは嫌や言つとるのよ。それに、ティーの能力つかつと
るのばれかけとる。うーん、仕方ないなあ、ここはうちの能力を使
つてさしあと退散してもらいましょ。ティーの能力はかなり使える
からな。まだほんまんに教える気はさうやしないで。まあ、反撃
や。

茶髪に向き直る。

「…………」

光を圧縮して放つ。「うん、簡単に言えばレーザー。うちの能力は光を放つことや。ある程度圧縮したり拡散したり出来る。これに当たれば痛いじゃすまさへん！」

「ちっ！」

あ、かわされた。まさかかわされるとは思わんかったわ。こなくそ、絶対当てるで！ って、あたらへん！！ どないして！？ええい、ちょこまか動きよつてからに。胸か、胸がないからそんなに早いんか。茶髪は本当に絶壁やからな。あ、これ言つたらあいつに殺されそうや。他にもうちの連中にもやな。

「…………左に撃つて」

「うん？ そこに撃てばえんか？」

「うん」

「ハイダラー……！」

「つきやーーー？」

お、直撃したわ。なんか吹っ飛んで行つたし、これでオーケやな。ふう、疲れたで。人一人抱えて走るのつて結構きつい。ちょうど温泉に入ればいいや。

「ふいー」

「…………はあ～」

温泉に浸かる。ふいー、もう気持ちがいい。あ、あいつらは大丈夫なんやろか。まあ、ええか。

第三十一話 ライとトレー放つ（後書き）

相変わらず残念戦闘描写で申し訳ないです。

次回はもうもうの事情により更新はお休みです。再来週にまた会いましょう。

第三十二話 美鈴の戦い

s i d e 三人称

美鈴^{メイリン}は目の前の金髪の女を警戒していた。目の前の女はここに入つてき、美鈴たちを襲つた者たちの中で飛び切り異質な雰囲気を放つていた。形容するならば他の者が幼き子供ならば、これは黒い大人。そう、この女だけ他の者にはない何かを放っていた。

かと言つて美鈴^{メイリン}に負ける気などわらさらない。この女を倒せばそれで終了。だから、手は抜かない。

「行くアルよ」

「ええ、来なさい」

美鈴^{メイリン}が女に疾駆する。女はそれを身構えもせずに笑みを浮かべ、待ち受ける。

「はあ！？」

掌底を女に放つ。女はそれを右手で受け止める。それなりの力で放つたはずだが、完全に受け止められた。掌底を握るその力は女子供のそれではない。美鈴^{メイリン}は後ろに飛ぶ。女は手を離さないものと思っていたがどういうわけか離した。そして、次は何？ と笑みを浮かべている。

「ふざけてるアルか？ 純粋な拳闘をバカにしてるアルか？ ワタシも怒るアルよ」

「あらあ、『めんなさいねえ、別にそんなつもりないんだけど』

明らかにバカにしたような口調。しかし、それに乗つて怒るような美鈴ではない。これが敵の作戦かもしれないと常に頭の隅にどぎめている。そして美鈴の様子が気に入らなかつたのか、女は更にバカにしたように言つ。

「遊びだからねえ！」

「そう、アルか！――」

握つた拳を繰り出す。それを女は受け流し拳を美鈴に放つ。体を回転させてかわし、裏拳を放つ。それを女は掴みとり、美鈴の腹に拳を叩き込む。

「グッ！――」

「あら？ なんか手ごたえがおかしいわねえ。これが中国の氣つてやつう？」

「さあ、どうアルかね！――」

お返しとばかりに美鈴が女の腹に拳を叩き込もうとする。だが、それは女に掴まれる。そのまま女に投げ飛ばされた。

「ぐうう」

「あらあ？ もう終わりい？ ねえ、もつと、あら？」

突然現れた氷の刃が女に振り下ろされる。氷で光の屈折を操つて行つた簡易的な光学迷彩を使つた奇襲。女は咄嗟に氷の刃を持つているであろう人物がいる場所を殴りつけた。何かが割れる音と一人の女の悲鳴が聞こえたと思いきや、トウカがそこにいた。殴られた衝撃でうめいている。

「あら、ねえ、大丈夫う？ あら、じゃあ、今回はこれで終わりに

しましょう？ 私たちはあ、遊びに着ただけだからねえ、人が来る
みたいだし、それじゃあねえ、中華鍋さんと、冷蔵庫さん」

女は仲間たちを引き連れて露天風呂から外へ消えた。

「なんだつたアル？」

「みんな、だいじょうぶー！」

シルが仲居と思わしき人物をつれてきていた。彼女たちが逃げたのはこのためだろう。とにかく、危険は去った。メイリン美鈴たちはそう認識した。そして、このことは透には言わないことを決めて、彼女たちは透の元に戻つたのであった。

「おひ、遅かつたな。そんなに温泉はよかつたのか？」

暖簾をくぐつて風呂場から外に出るとすかさず浴衣を着た透が出てきたところだった。

「うん」

「そつかよかつたよ。さてと、戻るぞ」

透に着いてみんな戻つた。この後、彼女たちが襲つてくることはなかつた。

第三十四話 幽靈？

結構な長湯だつたみんなも上がつてきたのでわざと部屋に戻ることにする。何か騒いでいた気がするけどまあ、誰もいなはずだし。そういえばさつき擦れ違つた人たちがいるけど、まあ、大丈夫だつたのだろう騒ぎになつてなかつたし。

「しかし、みんな浴衣似合つてるな」

風呂上りでまだ髪とかぬれてるから少し色っぽい。いえ、何を考えてるんだ僕は、やめよ。こには唯でさえ変態がいるんだから。とか、思つてたら田の前にいた。

「透うひひひひううう……」

「天昇下刻拳（唯の右ストレート）……」

「ぶべらあああああ

変態が宙を舞つ。空中で回転しながら飛んでいき、壁に激突。そして、壁にかけられていた絵画が変態の頭に落ちる。更に追加ダメージで変態はどうやら気絶したようだつた。

しかし、それはいいのだが、問題なものが見えていた。

「…………札？」

絵画のあつた場所にはびっしりとお札が貼つてあつた。明らかに何かを封じているような感じのものである。いやいやいや、これって明らかに悪霊を封じてるようなお札だよ……。

「ねえねえ、お兄ちゃん！ お札だよ……」の前あつてた肝試し

のトレーディングカードである。「…」

わかつてゐからシル頼むから言わないでくれ。明らかにそれだから。明らかだから。もう既に駄目だよ。幽靈いのよ！」。「うわ、こんなことに気が付きたくなかったよ。いやいや、妖怪みたいな存在が近くにたくさんいるからって明らかにこれはやばめな部類だ。

「この温泉には……」

つて、「うわ！」復活した変態が何か語りだした。しかも、なんだかホラーだし。どんだけ空氣読んでいるんだよこの変態。というか、やめてくれよ本当に……。うん、目の錯覚だ。錯覚。何か半透明の何かが通り過ぎたなんてあるはずねえ。

「ねえ、お兄ちゃん、何か通つたよ～」

シル……頼むから空氣を読んでくれ。はあ、いやいこよ。確實になにかいるよ。僕も見た。だけど、信じたくはないじゃないか。人間的。

「そうだな……」

「幽靈か！　おお、楽しみやな～、なあ、ティーー」

「……………」

お前ら本当に幽靈にあってそれが言えるか楽しみだな。それにしても「うー」と一瞬に反応しそうなエミがまったく反応せずに静かにしていることに物凄い違和感があるので、どうしたんだ？

「おー、HIIどうかしたか？」

「ん？　い、いや別に何もないぜ」

明らかに拳動不審だぞ。何かあるよつなもんだ。……あー、もし
かして……そいいえれば幽霊特集とかあつてるときこいつもこいつはい
なかつたな。ふうん、そつかそつか、理解した。

「お前もしかして幽霊怖いのか？」

「ギク！ はあ？ そそそそ、そんなわけ、ね、ねえし！」

ギクつて、言つてゐるぞおい。声も震えまくりだし、モロわかりだ
ぞ。なるほど、Hミつて幽霊が怖いのかちよつと意外だ。シルとか
大好きなのにな。本当に意外だ。まあ、言わないでおいてやるうこ
れ以上言つとなんか駄目そうだしな。

「だから言つているだろ？ この温泉には昔、働き者で人気者の女
将さんが居たんだ。だが、嫉妬で殺されて、夜な夜なこの温泉を徘
徊し恨み晴らすべく敵を探しているらしんだよ」

変態の情報だが、いつもよつは役に立つた。本當だつたらだ
が。

「敵討ちね……」

「そうだ、敵討ちだ」

敵討ちか。それつて、僕たちには関係ないけど、この場合だとよ
くあるホラーゲームみたいに誰でも良くなつてる場合とかるような
気がする。といふか、だからこんな風に封印されてたんだろうじ。

「ねえねえ、お兄ちゃん、わたし幽霊見たい！」

「つちもつちもー！」

「幽霊つてそういう簡単に見えるもんじやないぞ？」

「…………見えないけど、聞こえる」

それなら何とか見つけることも出来るかもな。しかし、この面子で誰か幽霊を何とかできるのかな？ 無理な気がするんだが特にエエ。怖がってる時点で無理だろ。

「父ちゃんはせせらーーー！」の田のために色々と頑張っていたのだ！

！

変態だから物凄い不安だけどとりあえずは何とか出来そうだったから、これで行くか。さてと、じゃあ、ティー頼んだぞ。

「…………わかった…………あつち」

ティーが指差した方向に僕たちは歩き出した。幽霊を探して。

第三十五話 幽靈搜索

「うわけで幽靈を探す」となってしまった。事後承諾だったがみんな乗り気だったのでよかつた。変態の話を聞いて、この旅館は広いということもあり、2人一組で手分けして幽靈を搜索することになった。見つけたら携帯で連絡しろとのこと。変態はこんなこともあらうかとか言いながら人数分の携帯を用意していた。これ、自作自演じやないだらうとか疑つたぞ。それに何で携帯、全機種持つてるんだって話だ。

それで僕はHIMIと今探してるわけなんだけど。

「あの、もう少し離れてくれない」

HIMIが僕にこれでもかってくらいくついてきて歩き難い。怖いなら来なければ良いのに。そう言つてもHIMIは強がつてついてきたし。それでこれはやめてほしー。

「そんなこと言わずに頼むぜ。いや、怖くなんてないけどさ。ホラ、なんかあつたとき怖いだろ」

いや、いつのまつが何かあつたときに危なこよ。といつか怖いって言つちやてるから。もう認めてよ。そしたら部屋まで送るからさあ。でも、そんな僕の思ひはHIMIには届かないことはなく、幽靈を地道に探すことに。

「はあ、じゃあもつこよ」

そのままにしておいて探索を再開する。

「しかし、本当に幽霊なんているのか？」

「や、さあな」

「まあ、靈感ないから見つからなこと思つんだが」

靈感がなければ見ることもできないし、見つけるのだって不可能だろ？。僕は靈感なんてないし、HIMもないだろ？。それで見つけられたら、相當強い幽霊ってことだろ？な。しかし、シルは見たつて言つてるからな。もしかしたら、相當凄いのが居たりして。ハハハ、そんなわけないか。つて。

「おい、HIM何固まつてんだ？」

「い、いた」

「何が？」

「幽霊」

は？ 何が居たつて幽霊？ おいおい、僕は何も見てないぞ。本当に居たのかね？…………いたよ。うそお。マジか。目をこするが消えない。どうにも本物のようだ。えっと…………うん、着物を着た女の子のようだ。あの変態が言つていたことは本当だつたみたいだな。これテレビとか出したら金稼げるんじゃね？ つと、その前に追わないとな。ここまで来たら正体確かめないと損だ。

「行くぞHIM」

「え、」

「え？」

「い、いや、行こうぜー。」

あ～、まあ、いいか。HIM自身が行こうつて言つてるんだし。それにしても、まさか、出るとはな～。世の中まだまだ不思議がいっぱいなんだな。いや、まあ、ね、僕の家が一番不思議だけどさ。物

の怪の魔窟みたいなもんだし。あいつらを物の怪とか言つたらダメだけど。対外的に見たらそうだよな。いや、考へないでおこづ。それよりも今は幽靈だ。

幽靈が曲がったと思われる曲がり角を見るが、その先には何も居なかつた

「居ないな」

「あ、ああそそうだな」

「ど」「行つたのやら」

お、誰かかけてきたな。えっと、変態からか。果てしなく出たく
ないが、仕方ないな。

「はい、何かあつたのか?」

『透か、いやな、出たぞ、本物の幽靈だ。まさか出るとは思わなか
つた。あの話も嘘だつたのに』

「おー、」「う」

聞き捨てならない」とを聞いた。あの話嘘かよ。くそ、無駄
に変態を信じた僕が馬鹿だつたのか。いや、仕方ないだろう。シル
が見たとかいつたんだし。でも、それで本当にいたつてのが驚きだ
な。どうやら、さつきのは本当に見間違いじやないようだ。

『ハハハ、スマン』

ハハハじやねえよこの野郎。携帯を無意識に握り締める。だが、
携帯がギチギチとなつていたので、力を緩める。今度本氣で殴らな
くちゃいけないようだなこの変態。まあいい、変態はおいておいて、
これからどうしようか。幽靈がいるのははっきりしているが、これ
以上探しても良いものなのかそれが問題だ。変態の幽靈が敵討ちを

している話が嘘だつたから害はないかもしないけど、幽靈になるつてことは何かしらの未練があるってことだからな。出来れば解消してやりたい。

「それで、幽靈はどこに行つたんだ？」

『知らん！』

「威張つて言つな」

『知らんものは知らないんだから仕方ないだろう。水場じゃないか？ その辺りに集まると聞いたことがある。それで、もしいたら着物を』

変態が余計なことを言つ前に電話を切つて着信拒否にしておく。これで折り返し電話が来ても大丈夫だ。さてと、また手がかりなしで探すことになるのか。どうしたもんかな。水場つて言つてもいるとは限らないし。

「仕方ない。水場に行くか

そんなわけで水場へ行くことになつた。

第三十五話 幽靈搜索（後書き）

ようやく更新することができました。
お待たせしました。

相変わらずリアルは忙しいので不定期更新となりますが、
がんばって更新して行こうと思っています。

闇章七（前書き）

お待たせしました！！。
ようやく更新です！！。

いや、本当に申し訳ないです。リアルが忙しかったとは言えここまで更新できないとはまったく思つてませんでした。

クオリティは相変わらずですし、これから先の更新の予定も微妙なところですが、完結までやめる気はないので、これからもよろしくお願いします。

少女は悲しかつた、さびしかつた。

彼女の世界には黒一色しかなかつた。暗く狭い部屋。ここが少女の部屋。

暗く狭い部屋の中で彼女は枯れた涙を流す。枯れて涙は流れることはなかつた。泣ければどんなによかつたか。

そして思う、どうして、自分だけこんな目にあつたのだろうかと。どうして、地下牢に入れられたのかそんな理由は忘れてしまつた。ただ、とても理不尽な理由だつたような気がする。だけど、友を助けるためだつたような気もある。

本当はどうだつたのか、忘れてしまつた。それほど長い時は経つていなけれど、考えることなんてないから、思い出していただけど、それも出来なくなつて、ただ過ごしていただけだから、忘れてしまつた。

少女は思つ。

外の世界はどんなものだつただろかと。今でこそ、自由に動けるが、あの中にいたときはどんな風に世界を見ていたのだろうかと。天井から入る小さな光だけ、そこから見える木だけが少女に時を教えてくれた。

何十回も、それが廻るのを見た。いつしか、空腹も何もかもがなくなつた。何かから解放された。だけど、何かに縛られた。

それから、何年の時が過ぎたのだろうか。

誰もこないはずの場所に1人の人間がやつて来た。

少女は思う。この人は何のためにここに来たのかと。

男は酷く残忍な笑いで、何かをしていった。少女にはわからなかつたが、男がそれをした途端、少女を縛っていた全てから、解放された。

そして、少女は立ち上がった。

間章七（後書き）

低クオリティですみません。作者は相変わらずの紙メンタルなので、批評とかはなるべく厳しくないようお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1854/>

モノもち

2011年10月7日12時09分発行